

「例の綴方の先生ね、あの人なんか一夏のかせぎ高が何千圓になるとか實に大學の教授も何も及ぶもんぢやない。谷本博士以上ださうだよ」

「へえ」一同は驚異の眼を睜つた。

「それで君、此頃は何千圓とかかけて立派な邸宅を構へたさうだよ。子供は大學にはいつてると云ふしね。まさに之れ教員の出世頭だらうよ」

「ハハハ、ちや木元氏以上だね、」

「とても。とても。〇〇訓導なども矢張り家を買つたさうだ。とにかく豪いもんだね」

「何をして、そんなに儲けますか」若い方の松山訓導が不審さうにきく。

「俸給が高いのでせうか」女教師のKさんが云ふ。

「何、俸給なんて矢張り三十圓そこらのもんですよ。全く本と講習とです。それに此の頃は又いろ／＼雑誌などに關係が出来てね」

「東京の訓導連中の中には全く我子の顔も見知らぬと云ふのがあるさうだね」と僕が問ひをむけると、此度はあべこべに新下りのY君は、

「それは又如何云ふわけで」と問ひ返した。

「と云ふのはね、朝早く出勤するだらう、子供のねてる中に、そして夕方は君、子供の寝て了つた時にかへるんだから」

「矢張り研究会でそんなにおそくなるのですが」松山君が感心してきく。

「何、家庭教師に行つてさ、何でも一人て三軒も四軒も廻るさうだからね。よく精が出る事だよ」

「T君など毎月足らぬ許りと云ふぢやないの？」T君と云ふのは私共の郷里から出てる東京〇〇の訓導である。

「さうださうだ。何でも毎月俸給の二倍程入るさうだ。それにあの人など餘りはやりもせぬし、本をかくぢやなしね。何でも國を出る時、地所など賣つて四千圓とか持つて行つたさうだが、もう幾らも残つちやいないさうだよ」

「金を使つて東京見物に行つてるやうなもんだな」
「様々なもんだね」

「話はずきから次へとはづんだが私は一世の教員成金たる其訓導の事を思うて何か知ら心の底に湧き返る思ひのするものがあつた。」

古都を目ざして

主事のOさんと私共とは依然として腐れ縁を續けて居た。不満に思ふ私の心は日に日に募つた。その頃私が父のやうに信頼してゐた首席のSさんは悪い病氣にかつて永く入院するし。やさしい校長は代つて頑固一徹のいやな校長がくるし、事すべて志と違つて私は面白くもない幾日かを送つた。

「せめて高等師範にでも行つて見たら」慙うした心の呟きが何時の頃から私の頭に湧き起つた。どうせ教員ならばもつと立派な教員になりたい。収入も多く、子供の教育にも事缺かぬ位にはとその頃の私の願ひであつた。

幸にも同郷の先輩で奈良女高師に訓導として令名高かつたD氏が故郷へ錦を

飾る事となつたので、自分は其の後を襲うて古き都の晴の舞臺へ上る事となつた。

世をあげて歡樂の春は來た。故郷の春は咲き匂ふ菜の花畑に彩どられて、新しき望みに燃ゆる私の心を浮き立たせた。私は二年振に故郷の地を踏んだ。嘗て親しき友の情の力によつて築かれた亦樂村舎も、今は涙と共に人の手に渡して了つた。放浪の人吾が亡き父の土饅頭へは、形ばかりではあるが一基の石碑が建てられた。當年の我が教へ子とも、懐かしき村人とも、はては山川草木、一として別れを告げぬものはない。十數年前、魚取つて遊んだ川、菌とりに興がつた山、流石に思出は多い。然し私は何時再びこの故郷の山河に接するか分らない。貧しき乍らにも私は大事な老母と妻子の外に一弟一妹を引きつれて異郷の人とならねばな

らぬ。家もなく屋敷もない身には故郷とて別に住みよいわけでもない。所詮私は再び此の地に住まふ事はあるまいと決心しつゝ、父の墓前に額づいた。

三月十五日、木、晴、春は淺し。肌寒の風いたる。十歩の庭先、梅花漸く笑ふ。木戸の桃の芽もや、青みてふくらめり。春日野のわたり春がすみ今やおぼろか。夢は寧樂の舊都にとぶ。さるにても母上の心のはればれせぬ悲しさよ。伏して後孝道を思ひ、發展を思ふ。一六年の日記より

下 高師訓導物語
着 任

其の日は折悪く猛雨であつた。團體遊覧のお上りさんで汽車はごつた返しの混雑古い都の篠つく雨を時代後れの鐵輪の俥に避けて、一行七人の家族は出迎ひに來て呉れた等々力、岡の兩訓導に導かれ豫て定めてあつた家に着いた。二君はそのまま學校に去つた。幌を洩れた飛沫にしつとりとなつた旅衣を抜いで、どつかと腰を下ろしてやれ〜と吐息をついた。六人の家族を引きつれた二百里の旅路。それに患いの二人の心流石に光明を追うには來たもの、家とは名ばかりの

...

狭さまくるしい室しつにどや／＼と信しん立げん袋ぶくろや柳やなぎ行李りょうりやトランクの間まに足あしを伸のべた時ときばかりは、何なんとなく。ほつとして淋さびしい哀あは愁しうがこみ上げて來きた。

「戸と口ぐちのこまさ(小ささ)どうか、飯ま事んごんごたるたい」
母はが先まづ口ぐちを切きつた。

「戸と口ぐちもさうだが、一た帯たいこの暗くらさは如何どうです、まるで穴あな倉ぐらですわ」きよろきよろと見み廻まわし乍はら彼かれが吐はき出だす様やうに云いつた。

「こんな所ところにやとても居ゐれませんね」妻つまも相あひづ槌ちを打うつ。

恚こんな風ふうで第だい一の不ふ平へいが先まづ住ぢゆう居きよについて起おこつた。それから一ひと月つき許ばかりの間あひだ彼かれは毎まい日にちのやうに借か家やを探さがして歩あいたが、どの家いへもどの家いへも氣きに喰くはない。縦たてに長ながく一ひと續つきになつた間まどり、光くわん線せんは元もとより通つう風ふうさへ考かんへない陰いん氣きな建けん築ちくの様やう式しき、丸まる

太たのやうな柱はしらをそのまゝ表おもて口ぐちに立たてた格かく子し作づくり、まるで働どう物ぶつを押おし込こめる檻をりだ。とう／＼彼かれは二ふた月つき許ばかりの中うちに四た度たびも轉てん居きよしなければならなかつた。

第一印象

就しゆう任にん式しきは何なんの異かりがなく極きまめて平へい凡はんなものだつた。翌あつ日じつは木き村むらと云いふ彼かれと同どう年ねんの訓くん導だうで昨さく年ねんから來きて居ゐると云いふ男おとこにつれられて同どう僚れうの家か庭ていを廻まつた。恚こうした間あひだにもこの學がく校かうの空くう氣きと云いふものを知しりたいと力つとめた。子こ供どもは實じつに七しち十じゅう餘い名めい。髮かみに風しちかのわいてるもの、半はんつぶれになつて居ゐる眼めの持も主ぬし、近ちかづいた許ばかりて惡あく臭しう鼻はなをつく兒じどう童どうさへあつた、これが直ちか轄かつ學がく校かうの兒じどう童どうなのか。豫かねて惡わるいと話はなには聞きいて居ゐたものゝ、眼まのあたり其その醜しう汚をな様さまを見みせられては一ま驚おどろを喫きつせざるを得えなかつ

た。
 初等教育の奥の院、一粒選りに選り抜かれた天下の名訓導捕ひ、定めし膽を潰す様な活動振と、舌を巻く可き教授振が見らるゝだらうと、躍り立つ胸を抑へて出勤する。二日三日と日は流るゝがさて何處にもそれらしい気分は見えない。業がすむとすぐラケットを提げて校庭に駆け出す。ワイワイ云つて嘶し立て乍ら碌に當りもせぬボールを叩いては喜ぶ。室に残つてる老人組の某々訓導などは何か知らコツコツやつて居るがそれが目ざましい研究物であるらしくもない。自分の隙な時間には努めて他の教授を參觀してみたが期待は悉く裏切られた。堂々たる天下の大教授家、何々教授法てな著述を二つも三つも發表して所謂名聲噴々たる人の教授も何の變哲もない。型の如く初まり型の如く終る。子供も騒げば、覺

えず了ひに終るものもある。一體何處に初等教育の奥の院らしい所があるのかと、彼は心算かに疑惑の鼓を鳴らさずには居られなかつた。
 ◎四月二十七日の彼の日誌は恁う語る。
 平凡の幾日かが續く。研究會があるではなし、本を讀むでもない。病後の主事は早く歸る。主事が歸れば後はテニスに花が咲く。生れて初めてラケットを握らせられたが、ラケットが狭いのか、球が活きてるのか滅多にあたるものではない。でもテニスをやらぬ者は人間の中ではないらしい。この學校では。矢張り官僚臭たつぶりだ。自分の様なズボラなものは一寸もでさうもない。いやに氣取つた某々訓導、女の教師までがツンと澄してる。だ、つ廣い職員室のどこかに官僚張な氣が漂ふ。その氣分が氣にくはぬ。自分がこれに同化さるるか、

空気を作り代ふるかしなければとても居たまるものではない。
 等々力君、藤村君等はいくらか氣安い。廉先生は温厚の君子人。外の諸君は一寸親しみにくい。木村君は好いが山川君はぶつてる。三谷君は面白い處がある。木葉君は僕に似た點があるのでいや。速水君は利己的な臭ひがする。岡君は何事にも世話のやける人だ。

官僚式小使

官僚の臭味は小使の末に迄泌渡つて居た。初任の訓導でこの小使に一本參らぬものは少い。參觀人などは文句なしに參つて了ふ人が多い。

『あんな參觀だつたか』

『え』

『靴を脱ぎなはれ』

云はるゝがまゝにして靴を脱ぐ。田舎から駈け出しの人などそれだけで、もうおどろ〜してる。勝手が分らずにうろ〜してる。『そこに參觀人心得が張つてあるがな』と指さるゝ所を見ると成程それらしいものが、何々セラルベシと云ふ形式で掲げてあると云ふ始末である。

大都市に近い此處では例の戦争景氣で人手が一時非常に不足した。給料は上らぬし小使等もより〜に逃げて了ふ。四人の定員なのが二人になつた。憊うなると彼等は滅多に教員の云ふ事をきかぬ。
 『オイ、小使お茶を持って來て呉れ』

「まだ出来まへん」

「何で出来んか」

「ハイ、お茶は十時からです。主事さんに聞いて見なはれ」

「え、さうか」てれ隠しに苦笑をして頭をかく様式は、一寸見られた圖ではない。

冬の日曜など學校に出かけて来た二三の教員が、ストーブをたく事を要求しても決してたいてくれない。教員自らが石炭を運びでも仕様ものなら彼等は赤眼をはつて争ふ、會計からやかましく云はるゝからかなんと云ふのである。Pと云ふ神經質な訓導は小使長に鉈を投げつけられて火のやうに怒つた。職を賭してもと力んだが結局はそのまゝ泣寝入りになつて了つた。次席のT君なども彼の爲に殺

すぞと怒鳴られて青くなつた事さへある。

何故こんな小使が威張るのか、それに就ては様々な譯もあるだらうが、仇敵のP君は恚う説明してくれた。

これは職員が悪い。職員に公私を混交する人があるからだ。私の用事に小使を使ふ、そして一杯のませる。折にふれて物を送る、その爲に小使はさう云ふ人のためになら何でもきいて呉れる。僕等のやうに公用以外に使つた事のない者、従つて彼等に何等の送り物もせぬ者に對しては、彼奴等實に横柄だと。眉尻をビク／＼させた。まさかさう許りでもあるまいが。小使に對してすら思ひ切つた物も云へず、御機嫌を伺はねばならぬと云ふ様な教員と云ふものゝ生活を私はしみじみはかなく思はずには居られなかつた。

判任官集れ

女と云ふものはだまつてるもの、男の次に従ふものと相場をきめて居たK君は今日初めて三十年の迷夢を破られたと云ふ。何、男一匹と力んでは見れど判任官の悲しさ、廿三四の女の助教諭や訓導（この學校の卒業生で成績優秀な爲にこゝに残つて判任官の仲間入りをしてるもの）たちに伍して、否其の下風に立たせられて目がばちくりしたらしい。

『明十一日午前七時三十分ヨリ判任官一同、拜賀言上ノタメ講堂ニ御參集相成度云々』と云ふ様な廻狀が所謂判任官一同に廻される。同日になると夫の面々が講堂に集まる。やがて事務のUさんが、席次の順に名をよび上げる。呼ばれた人が

ら一列に横に並ぶ。かねては随分と茶目もやるし、意見もあれば、女の教員など物の數にも加へて居ない岡君でも、矢張り後に立たせられておとなしく不動の姿勢をとつて居る。スーツとドアがあくと大禮服の金ピカがざらりとして顔の赤い大きなN校長の姿がのつと表はる。中央の壇上に立つて屹となると、判任上席のYさんがしづくと前に進んで「判任官一同謹んで紀元節を祝し奉る」と申上げる。高等官二等、勅任待遇の校長は、口をむぐぐ

『言上します』

これでこの式は終る。此の間僅かに三十秒。ではあるがその三十秒かなかつたら高師訓導も生命が三年は延びるだらう。

初めて質屋の暖簾をくぐる

陰氣な住居、不良な水、風土の激變はかねて餘り壯健でなかつた彼に禍した。來任後二月ならずして彼は病の人となつたのである。

ヒリ／＼と神経痛みた様に左の胸がいたむ。號令でもかけると胸が張り裂ける様に痛む。教授をするにもとても大聲は出されない。頭痛がする。熱が出る。食事が減退する。寝汗をかゝ、

「とう／＼、やられたな」寢床の中で彼は獨り案じた。それでも不思議に咳が出ない。咳は出ないがこれは全くラッセルに違ひはあるまい。

學校醫である松原醫學士は頻りに首を傾けては打診をして、

「分りませう、よくきいてゐてごらん」と云ひ乍ら、胸から横腹にかけて右と左と交互に叩いて見せる。なるほど左の方は音が濁つてる。

「氣永く静養しなくてははいけませんね、然し痛い筈はありませんがね」

よし死の宣告を受けた處で今更驚く事はない。自分は此迄成すべき多くの事をなした。二十二の春から今日まで十年に近い奮闘、腕一つで一家數名の命を支へ、妹を嫁がせ、又妹を學校に入れ、弟を教育し、母を安んずる等、自分がなしたいと思つてゐた事の殆んど總てをなした。それに學校の事も自分の修養も、自分としては相當にやつて來た。よし今死ぬなら死んだとて心残りはない。妻は？ 子供は？ さう云ふ事を考ふるならば際限あるものではない。人間の一生に於てなす可き事は實に無限である。自分が生れて來た所以のものは「母を安

んずる」の一つであつた。もう相當に其の目的を達した。これから先は母に費澤させる位の事である。

よし運命のまゝだ。

彼は斯う思つた。そして一人で安んじてゐた。

けれども折悪しく彼の妻も亦病氣であつた。それは外科的のものであつたけれども殆んど毎日病院通ひをしなければならぬ身であつた。

陰氣な、日光も空氣も幾年と封じ込められたまゝの室に彼は臥仰したまゝ、眼をつぶつた。

暗い影、それは眉根に深い皺を寄せて物業じ氣な老母の顔であつた。その顔がぐるぐると彼の眼先にちらついて来る。

「粥でもたべて見ないかい」

彼は軽く頭をふつた。

「さう何日もたべないぢや、やせるばかりだよ」

「……………」

「何かほしいものはないかい」

「何にも」

ばかりと眼をあけると母は何か口の中でつぶやいてる。こちらに引越す時に母が若い時から大事にして祀つてゐた、お観音様の像が見えなくなつて了つた。こんどの彼の病氣は屹度その祟りに違ひないと母は云つてゐた。然し彼は絶対にそれを斥けた。

「貧乏こそしたもので、これまで何とてなげく可き事もなかつたのに？　これは屹度引越の方角が悪かつたのでせう」彼の妻は云つた。然し元より彼はそんな事を信ずる男ではなかつた。さうした母や妻の言葉が今思ひ出されたのである。そして其の氣遣はしげな姿が、ぐる／＼と彼の頭の中に廻る。病院から歸つて來た妻が、彼の枕頭に坐つた。

「松原さんは、今度の治療に就いては一切自分が引き受けるから、何の心配も入らぬ。心おきなく静養せよ。と仰言ましたよ」妻の意外な言葉にさつと母の顔色が色づいて來た。

引越から此方の物入り續き、まだ來てから二月そこらの身には誰一人知る人も頼る人もない。元より日頃の貯へなどあらう筈はない。命にはかへられぬがさて

この先を如何して行かうかと打ち案ずるのは女として止むを得ぬ事であつたらう。

「まあ！親切な方ね」

母の言葉は喜びにあふれ出たものであつた。

「それに比べると△△病院なんてほんとに無責任で不人情で、全くいやになつて了ひますわ、今日も亦切開しましてね。」

「困つたもんだなあ、松原さんに外科が出來ると好いけどねえ」

初めて彼も口を開いた。彼の言葉も幾らか生氣づいて居た。

ともかくも彼は松原醫學士の非常な好意によつて氣永い静養を續けた。然し十日二十日依然として病は癒らなかつた。

「轉地でもしなくちや」斯うした言葉が誰云ふとなく彼の周圍に出た。

「休職になるでせうか」妻は時折それを氣遣つてきいた。二ヶ月そこらの事であるし學校の様子など彼には何にも分からなかつた。

「なるまゝさ」彼は投げやりに斯う答ふる外なかつた。

つと立つて妻は本棚から一冊の本を取り出した。バラ／＼と頁をくつて居たが、求むるものを探し出したと見えてじつと腫を据ゑて居た。見るともなく彼が覗くとその本は「學校管理法」であつた。

「御卒業なすつてから八年ですね」

「うん、何だそれが」

「いえ、何でもありませんが」

「退職給與金か」

「え、」

「そんなもの、しれたもんだよ、馬鹿な」

妻は馬鹿なの意味が分からなかつた。然し靜かに本を棚に收めて、につこりと座についた。

「一寸百圓は貰へますね」

「八年間の勞に報ふ可く金一百圓か、有難いね」

「ねえ、休職を願つてはどうですか」

「どうする？」

「轉地しませう！」

『馬鹿な』

彼はね返りを打つて向ふをむいて了つた。

百圓の金を貰つて轉地しようとの妻の考は一寸考へつきの様ではあつたが、實はそんな事よりも其日々々の事がより逼迫した問題であつた。やゝしばらくして、彼は言葉をかけた。

『明日は屋賃をとりに来るだらう？』

『屋賃ですか、それはちやんと用意してありますよ』

『どうした』

『そんな事御心配は入りません』

然し彼はどこからも金のはいる道がない事を十分に知つて居るのでそんな氣休

めに安心する事は出来なかつた。問ひつめられて妻は自分の決心を告げた。それは仕方がないから質屋へ行くと云ふ最後の決心であつた。兎にも角にもこれまで持ち續けて来た彼等の身分として、然も來任早々の質屋行き、それがどれ程辛い事であるかは十分に想像されるけれども今はそんな事考へて居る時ではない。

其の夜、夜更けて妻はモスリンの風呂敷包を抱て外に出た。空には星がふつて居た。残された彼はぢやらんぢやらんとつき鳴らして行く按摩の杖に顔をしかめて、彼女の交渉ぶりを思ひ煩ふた。うろくして暖簾の前に佇み乍ら中の氣配を伺つてるやうな彼女の姿、思ふだけでも彼には堪へられぬ苦しみであつた。

『三枚で………少くとも十圓はかして呉れるだらう？』

彼が胸算用をしてると、がらりと戸があいて妻は歸つて來た。母も氣遣しげに

彼の枕頭にやつて来た。

「どうだつた？」彼の手に依然として風呂敷包があるのを怪しみつゝ彼はきいた。

「いけなかつたらう」母も言葉をはさんだ。

「ねえ、どうしませう？」

「どうつて？」

「保証人がなければ出来ぬさうですよ」

「何保証人が！」

「え、何でもその保証人と云ふのは、そこらに居る、ば、あて、それを専門にやつてるんださうですわ」

「困つたなあ」

「まさか、あんなものにねえ……」

夜はふけて行く、彼の胸は又ひし〜と病み出した。

薄らぎ行く友情か

哀を人に乞ふは男の最も恥づ可き事であらう。然も親の脛を噛るは未だ以て恥とはならぬ世の中である。不幸にして噛るべき親をもたぬ彼は前歯のむけ場がなかつた。慙うした時に訴へ出づるものは矢張り友より外にない。聊か快くなつた或る日、彼は三四の友に對して此の急場を救ふべく金策を頼む手紙をかいた。そして幾年かの昔彼が戀人に手紙をやつたやうな心持してその返事をまつた。返

事は来た。然したゞ一つも彼の満足に價するものはなかつた。紋切型の謝絶の手紙を讀めて彼は、友情のうすらぎ行くを泣いた。これが若し當年の友であつたらばと彼は寢食を共にして居た學生時代を懐ふて、何んとも云ひ知れぬ淋しさを感じた。

その後一年ならずして彼は一封の手紙を友達から受け取つた。

中には細々と友達自身の最近の消息が述べられ、そして其の最後に右の事情で事實首も廻らぬのだから五圓でも十圓でも好いから何とか世話してくれと云ふ事がかいてあつた。其の時、彼は勿論壯健な體になつて居たが、さて其の五圓か十圓かと云ふ金が彼の手にあつたかどうか。彼は生れて初めて友達達の難儀をきかされた。彼の心は嘗て受けた友の情義に對する感謝の一念で燃え立つて居た。何とか

して是非此の要求を入れてやらなくてはならぬと考へた。然しいくら考へてみた所でない金は出て來ない。元より彼には一文の貯金もない。彼は思ひ切つて同僚某の許に行つて其の財布の底を叩かせた。だが然しこれも亦その目的を達すべく餘りに貧弱であつた。

『フロックを質に入れてゝも』と一寸は考へたが、さて實行するには餘りに力弱い決心であつた。あれかこれかと考へた末、彼は矢張り極り文句の斷り狀を出すより外に仕様がなかつた。

そして思つた。憊うした友の難儀をきいた時、ヲイそれと五圓か十圓の金も世話出來ぬ今の身の上、そして一生涯の中一度は世話が出来る様になる日が來るであらうかと。

嘗て彼自身が病氣の折、訴へた時の友よりの返事が、餘りに冷淡なのに泣いた彼は、今自らが餘りに冷淡な返事をかゝねばならぬ身の上を更に別個の意味で泣かずには居られなかつた。

あゝ友情のうすらぎ行くのであらうか？ 否、否。

梧桐の葉かけ

『オイ、加州、作つたな』

『此の物價騰貴の世の中に、えらい贅澤なもんだなあ』

『いや、なに』加州は例の如くにこゝとしてる。

『僕なんど、もうこれを十年着るわい、染め直しが三回、縫ひ返しが一度』大隈

侯のニツクネームを有するM君は、つい此の頃縫ひ返した春廣の胸をかき合はせて聊か感慨の態である。

『校長（前任が校長だつたので今だに其の敬稱を用ひてゐる）と堀君と作つたのが三八とか四八とか云つて居たよ。とてもやりきれたもんじやない。』

そこへ此の學校の人氣女であつたMさんがやつて来る。Mさんは此の頃何悟つたか髪を馬鹿にハイカラに分けて居る。

『Mさん、今東京ではそんな風の分け方が流行て居ますよ』つい此の間東京へ出張して来た國語のH君が戲ふつもりで云ふと。

『おや、さうですか、それじやよかつたわ、私時代後れじやないかと思つて居ましたわ』けろりとして人を食つた返事にH君返す言葉がない。

「Mさん位悟つて居ればもう好いや」
 「へッへッへ、私を悟つてるとおつしやるのは、まだ私をよく御存じないのですわ」

「さうかね！」

分團教授のS君がだるま然としてやつて来る。創造教育のT君が薄い鬚を捻り乍ら来る。今始業前五分と云ふところだ。

「先生、御新調で風采が大變上りましたわ」Hさんは、加州をからかひにかつた。

「さうかね」多く語らぬ加州は矢張りにこゝくしてる。

「オイ加州一本参つたね」

「Mさんからなら二本でも三本でも好いわい、むしろ光榮だ。ワツハハ、」
 「今日はやるぞ、昨日はあつたな。どうだ、もう番附を一つ變へようじやないか」音楽のI君はねても起きててもテニスの事よりない。人がどんな事話てるやうと自分は必ずテニスをもつて話しかけ、テニスを以て終るんだ。

「あんな、ぼろくそなまけ方をして又やるのかい」

悪口屋のHが云ふ。H君はテニスの講釋が巧いので口でテニスをする人との稱がある。

恚うして始業の鐘がなる迄、梧桐の葉影は毎朝々々他愛もない話して賑合ふのである。そしてこれが最も好い兒童看護法であるから。

而立日記

一月一日

◎古聖の所謂三十而立と云ふその三十の年が来た。愈々獨立獨行すべき年が来た。僕としては物質的には既に二十二の春即ち八年前獨立生活に入つた。然し精神上には幾多先輩の指導にのみたよつて居た。全く自己と云ふものがなかつたやうに思はれる位だつた。本年から物質精神兩方面に於て鮮かに自我を發揮して獨立の光輝ある生活に入りたい。

◎男の三十は正に働き盛りである。將來如何なる事をなす可きか、三十より四十に至る此の十年間は余にとつて最も榮ある年でなくてはならぬ。少くとも自分の

活動が社會的に國家的に何等かの意義あるものでなくてはならぬ、個人としては元より一家の基礎を確立し自らも以て聊か意を安んずるに足るべき活動をしなくてはならぬ。其の拔錨の第一年として本年は自分にとつて餘程強い意味を有する年である。

◎年末から年頭（本朝床の中にて）にかけて自己の將來を卜した。如何に此の十年の仕事に豫定すべきか、未だ俄に鮮明なる對照を描き得ぬとは云へ大凡次の如きを標的としたい。

- 一、兒童研究、教育の根本及實際上の諸問題解決
- 一、兒童文學の研究、お話、讀物等の改良、創作、批評
- 一、家庭改良、模範的家庭の建設

◎尙經濟の確立を計る事最も肝要なる事項の一。

◎午前六時起床、紋付袴の禮装にて春日神社に詣で國運の隆昌と一身一家の安全を祈り、神々及皇室に對して賀詞を述べ。歸途薄明、嚴霜霖たり、林間雉子の泣くをき、瑞祥を思ふ、歸來型の如く元朝の儀式を濟す、お茶、屠蘇、雜煮の順なり、元朝の儀式は家庭的に今一層改善を要す。

◎八時半より出勤、既に判任官拜賀相濟みたる後にて、正月早々の失敗を演ず、學校の儀式も亦型の如し。

◎式後圖書室にて屠蘇あり、之を以て同僚の往來は略すべしとて一同の申合ありされば御互に回禮も必要なかるべしとて歸る、一同は尙廻禮のつもりらし。新米者として一同に従ふを要すべきか、即ちT、S、H三君と共に廻る。

◎所謂名刺配達に過ず、殊に滑稽なるは學校にて年賀もすみたる御互の間に、そつと玄關に立つて名刺を投じては歸る。せめて家人に挨拶でもすれば好いに、餘りに無意義ならずや。

二月二十四日 好晴

◎なす可き仕事徒に多うしてなす事一もなかりし今日の淋しさよ、なさんとする意氣と淋しき悔痕の情とに、はさまれて夜も何等なす事能はず、もだえと苦しみると、不快と輕き不平とを抱きて早く床に入る。

◎まともに自己の真相を凝視する事の出來ぬ迄に雜駁な精神生活に追はれつゝある此の日頃のはしたなさよ。

三月二十一日 好晴

◎朗かの春日和 半日を煤拂に過す、午後學校に行く、阜月會の卒業生を送る會あり。一寸餘興をみて、三時より櫻木と散歩す、片岡の櫻満開なり、花下に牛鍋をつく人もあり。若草山に登る。道に人生を語る、彼の曰く「人は感官あるが爲に之に囚はれて本然の性をそのまゝに伸す能はず。例へば櫻花の満開せる前に薊がヌツと咲けるが如き大膽なる事は到庭人には出來ざるべしと。」官能の欲する所そこに所謂自己本然の性の存するものなれば彼が云ふ如き官能そのものに囚はるゝに非ずして、そはむしろ自己に囚はるゝと云はざるべからず。此の點に就ては不幸にして彼の徹底せる説明をきくを得ず、談はず、みて本然の性を發揮する事に及ぶ。人間がつくす可き責任。行き可き最好最適の途は只一あるのみ。その途たるや實に運命の命ずる所にして人は早くその途を發見し、之に従ふてす、

むこそ最も幸福なるものなりと、説やよし、されど人生には往々その行かざる可らざる途と、行きたき途と（本然の性が欲するものと環境が然せしむる途と）異なる事少からず。かゝる際に當りて人は一種のデレンマに陥りて半煮の態度に一種のアキラメにて世を渡るべし、若し此の際我が欲する性のまゝに行かんか、そこに多大の犠牲と、悲劇とが生ずべし。此れ僕自身の苦き經驗なり。彼がこし方の生活が單純なりし爲此の如き複雑なる人生の半面を知らず、爲に彼の思想の單純にして然も力強きものあるを羨む。

◎人の行く道は果して一か、然り最も恰適せる道は一のみ、その途を進む能はざる人は果して不幸なるか。然り不徹底、虚偽の生活を送り、自ら満足する能はざる此れ不幸のみ。

我がこし方の八九年、教育者としての努力と健設とは、常に半面に於て一種の苦悶と不平とを有したりき。自ら沈思してその罪を思ふ。自己の眞生命を捧げて、教育の事に眞剣なる能はざる態度を悲しむ。此れ實に行く可き道を行かざりし當然の結果のみ。此の日頃連日連夜淡き苦悶あり。火鉢にもたれて思ふともなく思ふ。なさざる可らざる仕事あり。なしたき仕事あり然も一もなしたくなし、なし能はざる也。仕事の出来ぬ悲しみ、此れ予の悶えなり。眞剣に身を打ちこんで仕事をして見たし。之れ予の希望なり。あゝ予は予の希望を達するの日來るべきか、はた又絶対に自己を殺して了うべきか。

三月二十四日

卒業證書授與式なり、百に越ゆる職員、幾百の來賓幾十の父兄堂にみつ、官僚

ぶりを發揮して例の如く椅子に一人名札を貼て席を定めらる。得意になりて上に倚る女教員もあり。勅任教授より下一雇員にいたる迄、總て之れ一個の人間の。官位を以て自己の装ひとせるもの果して己が眞の力なるや。私に思ふ、此の内、裸になしてなは衆に勝る力を有するもの果して幾人かあると？内より發するものに非ずして外より與へられたる或物の爲に、自ら偉いものとなれる人は在り、その或物の力は之れかり物のみ、無位無官の一布衣として、人間として、動かす可らざる力をほしと思ふ。如何にして之の力を得べきか、三思せざる可らず。

四月末より五月初にかけて

市制施行二十周年祝賀會があつて街が可なりに雑沓した。三十錢で提灯一つ求

めさせられて門口に吊したより外に何等市民としての祝意も表せず又もち合せの祝意もなかつた。合同の運動會や旗行列などまるで本気でやれもしない。只慫うした事に周圍の者と共に押されて行くのが淺ましい。

◎とかく健康のすぐれない此頃の生活は、内容の充實に於ても實に貧弱なもの、碌々瓦然、自ら考へてみても悲しくてたまらない。それでも四五年前に比べると自ら戒むる心もうすらいで、ともすれば儉安の生活に甘んじようとする傾きが生じて、悲しくもないやうになつて來た。これで好いのか。

◎新緑の影、若葉の匂、身に快い氣温、くれ行く春の淡き悲みよりも萌え出づる初夏のこの氣分が嬉しい。今日の臨時休業を、のんびりした心地で机に向ふのが何より嬉しい。

◎庭先の松に黄色い花が咲いた。風に花粉がとぶ。のんびりした光線にすかさず透明にみゆる、床には白の花菖蒲が活けてある。慫うした氣分は頻りと自分に田舎を思はせる。そして又一つの聯想は昨年今頃井上町のあのむさくるしい家で、青葉を懐しがつた事を

◎淋しい生活だとも思はない。然しそれは外面的な見方をするからだらう、實は自分の本心は淋しさに泣いてるのかも知れない。それなのに矢張りズル〜と引かれて行く、押されて行く、これほど苦しい事があるだらうか。それでも自分は苦しまない様になりつゝある、あゝ芯が止まつたのか知ら(四日記)

五月十七日 雨

◎今日あたりは何とか黒田よりたより來るべしと思ひ居たる所歸つてみれば同時

に四枚のはがきが來てる。故郷に歸つての彼の感想やおのろけやが例の調子でかいてある。慙うしたお惚氣を僕の外に誰に云ふだらう！

◎一昨日の朝、起きる少し前、フト未だ嘗てない一種の感想と云はうか、何と云はうか妙な感興がわいた。と云ふのは、未來を信ずるの心である。未來は必ずある。又あるものと思ふて現在の生活を慎めよと云ふやうな極めて平凡な事ではあつたが、それがいかにも力強く、ピシツと胸にひいた。ほんの瞬間ではあつたが何とも云へぬ強いものであつた。

それに昨夜は又、二時過ぎに眼がさめて、とりとめもなく心が冴える。田舎が戀しい。新緑が懐しい、土に親しみたい、野菜を作つたり、果樹を植たりしたい。五六年前の生活振がなつかしいと、死ぬのじやないか知ら。

◎細君のいやな姿、安白粉の斑についた顔、しまりのない口、きたない齒、慙うした印象が浮んで來る何だか悲しいやうな、絶望的な想念が……

◎教員生活はいやだ。然し今から商買換も一寸むづかしい、折角築いた地盤を！それでも自分は將來どれ位の處まで行けるか、此の頃の怠慢、もう人生がいやになつた氣がする。貧弱だくと思ひ乍らもその日ぐらしをして行く、高師訓導としても、ほんとうにつとまらないと思ふ。やるせないと思ひ乍らも矢張なまけて行く。

十月十一日 金、曇

秋霖漸く霽れて、尙ほみ空は曇りがちな日が多い。熊本の秋にみた、からりと空高くはれた、體がシャンと引きしまる様な日は少い。淡い墨を流したやうな雲

が春日の山腹にかけてる。朝の間は秋らしい懐しさがある。校庭に立つて子供の騒ぎ廻るのをつくねんと眺める。考へるともなく熊本が懐しくて堪まらなくなる。櫛紅葉の美しさ。けたましい百舌の泣き聲の氣持よさ、柿の喬木に残れる實、矢張り生れ故郷の自然は忘れぬ。故郷の人は皆嫌なもの許りだつた。然し故郷の自然は懐しくて堪まらない。人事のいやさに自然の美をすてた自分は、再び自然を慕ふて人事の俗悪を許容したいやうな氣も起る。

校の西堤の上にもすゝきの穂が出てる。彼岸花が紅く咲いた。僅かの處にも秋は見出だされぬ事はない。然し囚はれた秋色はいやだ。からりとした秋色にふれたい。

秋そのまゝの懐に抱かれたさに遠足がしたくてならぬ。此の間から計畫して

るが日曜毎の雨でお流れ許りだ。琵琶湖あたりの秋色がなつかしい。三年昔文檢のかへりに訪れた江州の秋色がなつかしい。あの黄熟した稻田の中を走る電車と松の並木、どこであつたか知らぬがおぼろげな印象が頭の中でをどる。

◎梧桐の樹蔭に立つたまゝつくねんと考ふるともなく考ふ。生の意義が分からない。悟つたやうで悟れない自分が果敢い。何か知ら囚はれた氣色、そはくして落ち付きえない心地。何を樂しみに、何をめあてに？分らない。只三圓五圓の原稿料を唯一のたのしみに拙いことをかく事。どこからか知らぬが手紙は來ぬかと、あてもない便りをたのしみに心まらしてゐる。現在の學校生活そのものに大した價値も意義も發見し得ない自分の生活を儂ないと思はないでは居られない。心から語る友も人もない此の頃の生活は矢張り淋しい。所詮人間の世にはさ

う會心の友のあらう筈はないとも思へる。學校の教員なんて云ふ人々にさう物事の分つた人のあらう筈もなく、又斯うしたより集まりもの、中で會心の友などを求めやうとするのが無理かも知れない、仕事かたのしみ。此れは自分にとつては最も力ある強い事なくてはならぬ。然もその仕事か

◎秋になればきまつた様に頭痛がする。此の頃は除り大した事ではないが只僅かばかり頭の一角が重い。秋は胃が弱るせいではないかとも思ふ。胃は可なり強くなつたがまだ矢張りいけない所があるのだらう。たべる事だつて平生より餘計にくふと云ふわけでもないが

だからと云ふて日々の仕事か自分が自分には嫌でも何でもない。さうとび付いていそいそとやる程たのしい面白い仕事でもない代り別して嫌な仕事とも思はない。ニ

コニコと學校を出る。新聞をみるのが先づたのしみの一つ。教へる。まあ平凡だ。月給をいたゞく爲めの仕事、それ位のものだらうか？誰だつて此の仕事により以上力を入れてるらしうも思へないんだが？人には斯うした不安はないのか知ら。人生一代には何かもつと安心の出来る仕事をしてみたい。これで校長になつた處で矢張り仕事は斯う平凡だらうか？もつと底に力があつてほしい。

◎此の間等々力。櫻木、木村、岡など、文藝の月評會を催したいと話合つて居た。文藝に限らないが藝術とか趣味とか云ふものは人生にとつてどれ程その生の意義を認めしむるかも知れない自分の經驗から考へても藝術同好の士と語る時ほど光りあるものはなかつた。久しく枯渴したこの藝術の話しを互にやる事が出来るかと思ふと聊か嬉しく思へたが、それも練よろこびに終りはせぬかと思ふ。

どうも彼等に果してそれだけの熱があるかと怪しまれる、否僕の内心の要求を満足させて呉れるか問題だ。

◎この日頃、田舎もの、古くさい南畫の繪かきが来た。何かしら個性も何も無い傳統的の山水をかく、それを多數の職員が頻りと感心して何枚も買うて居る。それをみるともうウンザリして了ふた。うんとせ、ら笑つても仕方がない。

◎N・U君が大阪の小學校長になつた。月給が八十圓だとかで皆の者の羨望の的になつてゐるらしい。僕とても京阪邊で校長にでもなりたいと思はぬ事もないが—現在の仕事より決して意義多いものとも思はない—皆して餘りにちやほや云つてるのがイマ／＼しい。何つと力む丈の氣概と節操とのなさすぎるのが不快だ。流石にその點は等々力や、櫻木や岡がえらい一寸もオクビにも出さないから。

◎物價騰貴も愈々ひどくなつて来た。米一升が五十三錢と云ふ世の中、食堂で一食六錢のパンをくふものがどん／＼ふえて来た。物價騰貴で辨當を拵へるのが高くつくからパンをくふんだと大ビラに高言しうる勇氣なきを悲しむ。

◎長らくリュウマチで困つてゐた妹がほゞ快癒して昨日熊本へかへつた。妹がたつた一人熊本へ、斯うした事にも何等深い精神の感觸がないやうになつたのは如何したわけか。

◎耳をすますと琴の音がする。前庭で秋蟲が泣く、鹿の遠なきもきこへる。やがて又大佛の鐘がなるだらう！

十一月十六日 土、好晴

奈良の秋は雨にあけて雨にくれる。秋霖何時はるべくも見えなかつた。折角の

長い思ひがけない休みも雨ばかりでとかこつて居た。計らずも今日こそは快晴實に此の秋以來初めての好天氣、朝の間だけ續きの古今集をみて居たが、障子にさす暖かい日脚や窓外の雀のなき聲など、とても静居を許さない。學校に出て雑誌など見る。

◎午後は縣教育會主催の講演會に行く、K博士の明治天皇と聖德太子と云ふ講演があつたが、凡俗低幼、とてもきくに堪へない。内容と云ひ、形式と云ひ、あれでも博士かと思はるゝ位だつた。でいやになつて歸つてしまふ。學校にきてテニスを一叩いたが餘りの好天氣にどうも興が乗らない。こんな時に子供でもつれて郊外でも散歩したいと思ふて……

◎湯で温まつて氣分が更にのび〜、然し夕刻から少し頭痛がする夕飯の後は一

時間餘り家人と話した後櫻木のところに話しに行つて快談數刻。

◎米國から姑たちが歸ると云ふ。細君は大喜びで夜も碌に眠れない位だ。自分とて嬉しくない事はないが何となくいやな氣がする、と云ふのは今まではかく幾千哩へだてた中で自分共の生活の様相もさつぱり分らなかつたが、愈々歸つて來られるとこのみじめな物質生活の様相があらはに分つて了ふ。物質生活の外に世界の存在を知らない人にこの窮迫な自分共の生活をみられて様々な感想を起させるのが辛い。M子が來て五年、たつた一枚のはれ衣さへ作つてくれなにかと思はれるのが苦しい。彼女とても相當に稼いでるものを。さうした眼で自分共の生活を批判されるのが恐くて……

◎たとへ如何程平凡な事でも人が云ひ難くして居る事を言ひ破る事は如何にも痛

快なものである。そこには餘程の努力と勇氣とが入る。人にもし街氣と云ふものがなかつたならばその人は實に偉い人。力ある人に違ひない。鼻クソほどでも人に偉く思はれやうとしたり、金持のやうにみられやうとしたりするものだから下らぬ處に弱味が出る。赤裸々に自己をさらけ出して人に接したら其處に異常な強味がある。街氣を去れ、皮をぬけ、自然に歸れ。

◎高師訓導生活の改善と云ふ事が櫻木との間に随分永い間話された。妙に老大ぶつたり、茶化したりする空氣を一洗したい。もつと自由な鮮活なアトモスフィアを作りたい。潑刺たる氣分を作りたい。何處をきつても鮮血がさつと迸る様にある。切つてもきつてもドスぐろい血がちつと許りにじみ出るやうな人間の集まり、ほんにまアつまらない。

◎矢張り東京でなくては駄目かなア。文藝の話せる人がないし、人生に徹した人がないし、精力の絶倫な人がないし、霸氣の満々たる人がないし。よそ目にはエライやうにみえても案外貧弱な人の多い世の中だ。

◎愛とは何ぞ、愛に理性が必要だらうか、愛はその人の欲求である。本能である。愛する事に理窟はない。愛せんと努力して愛する事が出来やうか、愛せまいとして憎む氣が起らうか、所詮愛は本能の發現であると思ふ。文學は愛を取扱ふがよい、然しその愛は高汎なもの、人様々なものそのまゝで好い。

宴會どころか禪がかけぬ

『A君はどうかね』

「御免蒙ります」

「B君は？」

「私も」

「C君、君は是非出て呉れ給え」校長の語調にはやゝ狼狽の色があつた。

「何故です、私ばかり出なければならぬ事はないでせう」Cもむきになつて喰つてかゝる。

「いや、君ばかりぢやない。私も行けばP君も出る。それに……」

「校長さんや首席さんが出るのは當り前ぢやありませんか、私共ひら訓導はかねて御引立を蒙る事も少かつたんですから。ねえ君、さうだらう！」次席のC君は援兵を求むるが如く一同の方を見渡した。

「先生方お二人お出でになつたら好いちやありませんか。いくら市長さんの別れだつて食ふものも食はずにおつとめせなければならぬと云ふ法はありますまい」D君が肩そびやかして横槍を入れる。

「そりやそうだけれどね。恁う云ふ事は権利や義務で行く事ぢやないからね。物は相談さ、内の學校から許り餘り無人数ぢや何だかね……」

「だから相談してゐるぢやありませんか、お二人になさつたら好いでせうと」
「まア、さう云はんとC君だけは出て呉れ。ねえ君、そりや困る事もあるだらうが」

「困る所ですか。此節ちや茶粥もすゝれませんかよ。」

「さうだ、僕等は禪さへかけないんだ」

餘り物々しい議論におどおどして見て居た女教員が一時にとつと笑ひ出した。校長もにつこりする。

『だつて、ほんとうぢやないか。今頃三圓の金がどこから出るかい。馬鹿な』

流石の校長もより以上すゝむる勇氣もなかつたと見えて、すこすこと校長室に歸つた。

これは△△市の第○小學校に於ける或る日の對話である。偶々私は所用あつて同校に行つて居た爲に此の會話をきく事が出来た。そして誠に案外な思ひをした。何故ならば從來多くの場合教員と云ふものは校長の云ふ事などに餘り逆らはないものだと相場がきまつて居たからだ。誠に脊に腹は代へられぬ、今や小學校師も自己の所信を大膽に述べなければ實際生きて行かれないまでになつたのである。

大正八年六月。東京市内に於ける小學校教員飛檄事件と云ふものがあつて以來、全国各地に教員のストライキ様なものが行はれたと新聞紙は報じた。之に對して識者の批評が二つに分れた。其の一は教員としてかくの如き舉に出づ、誠に以て怪しからぬ次第である。自らストライキをやつて兒童の教養をば如何にしようとするか、昔乍らの徹の生えた御説法めいた意見と。今一つは誠に好い事をしたらんか。自ら信じ自ら欲する所を堂々と要求する位の勇氣がなくてどうする。と云つたやうな全々反對の意見とである。諸君は果して其の何れに従はんとするか。棚から牡丹餅は落ちて來ないのであるが紳士が尻をまくつてべらんめえ口調

で白眼をするのも何だか……

存在すらも認めない

湯浅先生は師範の簡易科を出てから既に二十三年に於ける。専心一意育英の事に従事されたお蔭で今では此の村の小學校長（今頃尋常正教員で校長たるは中々稀であるから異数の立身と云はねばならぬ）で月俸金參拾圓を貰ひ、外に四圓の年功加俸と月三圓の臨時手當とがあるから月收正に三十七圓で田舎では先づとり頭である。先生の部下に代用教員をして居た太田君は、此の冬の景氣にすつかり參つて了つて紀州の山奥に引き込んで了つた。山奥に引き込んで山猿相手に炭焼人夫となつたさうである。詰襟の洋服を脱ぎすて、袴纏の扮装、眼鼻は木炭で

まつ黒くなつてるが、収入は大したもの日に五圓に當る事すらある。景氣がよくて校長さんの俸給や、其の生活振を思ふとおかしくてたまらないと云ふ。多くの教員仲間では太田君の収入を羨んでるが、さて容易に詰襟の教員服が脱げさうにもない。脱ぎ得ないのでなくして鼻を黒くす事が何となく怖いのである。首席の谷君は可なり根氣よく増俸をまつて居たが、とうとう痺れを切らして飛び出した。此の人は首席にまで務め上げて居ただけに流石に炭焼にはならなかつたが、大阪に出て何とか商店の番頭さんになつて了つた。或る時湯浅先生が何年振かて奥さんと坊ちゃんをつれて大阪に出た序を以て訪ねると

「や、さやはつたなア」と紺の前垂の埃を拂ひ乍らにこにこして迎へて呉れた。丁度店が引ける時間だつたので谷君は校長一行を自分の住居に案内した。谷君の

住居はすぐ店の近くで、狭い處ではあつたが座敷はさつぱりとして居た。「まあ一杯」と云ふので、先生は久し振に生ビールのコップを抱え乍ら眼を細くしてあたりを見廻して居られる。

「どうだす先生、あんたもこつち來やはらんか」可なりアルコールが廻つた頃谷君が切り出した。

「うむ」

「そら教員よりや、ようござつぜ。仕事は教員のやうに氣樂ぢやおまへんけどな、」

「さようか」と湯淺先生はコップを抱えたまゝ、何か思案して居られたが、突然歸ると云ひ出して、とうとう谷君がとめるのもきかずに、引き上げられた。

「谷の奴、おれを誘惑しよつたな」先生は先に立つでぐんぐんと急いで行かれる。町はづれの停留所まで來ると坊ちゃんが頻りに物を強請るので、先生はとあるバーにはいられた。そこには澤山の労働者や會社がへりの事務員らしいものが一ぱいたかつて飲んだり食つたりして居たが、給仕女は

「おはいりやす」と一聲景氣よくかけたざり、席の世話さへして呉れない、ぼんやりと三人は立つたまゝ此の光景を眺めて居られたが、絆纏の男も背廣の男もみんな二三圓の勘定をすまして、好い氣色で出て行く。席があいたかと思ふと又何時の間にか違ふ客が來てもう腰を下ろして居る。

「こしかくるとこあらへんがな」奥さんが痺れを切らした。

湯淺先生夫婦は「チョツ」と舌打ちしてそこを出て行かれたが、誰一人それに氣

付くものもなかつた。

粥をすゝる音

その頃私の細君はさる市外の小學校に出て居た。その近所の某學校では校長の俸給が三十圓で最低の者が十二圓であつた。有名な貧乏村で臨時手當など容易に出さなかつたらしい。貧弱町村と云ふので。例の國庫補助の中の幾らかの金がその學校に下つたわけであるが、それは一厘だつて待遇には使はず、使もせぬ理科機械の爲に費されて了つたさうである。その學校の首席と云ふ人が誠に可愛さうな人で勤続十年にもなるのに俸給僅かに二十七圓で一家五人ぐらし。一週間に一度の當直には必ず放課後小一里も離れた町はづれの家まで夕飯に歸られるし、

朝は又くらしい中に起きて朝めしに歸られると云ふ事であつた。そして勿論中食ぬきの二度食と云ふのである。

ある時、私は何かの用事で其の首席の宅を訪れた事があつた。どぶの臭ひがむかつと鼻をつく小暗い路次にはいつて立並んだ長屋の表札を一つ一つ吟味して行くくと、其の行詰りのところに△△△と名刺がはりつけてあつた。中から子供の泣き聲と女の叱る聲とが同時にきこえる。

「御免」と二三度呼んで見たが應じて呉れない。私は思ひ切つて格子戸をあけて中にはいつた。夜の七時頃であつたのに折あしく今御飯時らしい。何か物をすゝる音がする。悪い時に來た。幸まだ氣がつかぬらしいからこのまゝ引き返さうと思つてると。

「オイ、誰が来たんじやないか」と云ふ男の聲がする。

「あんた、見てお出でやす」女の聲である。子供の泣き聲がはたと止んだ。ばたばたと子供の足音がして出て来たのが六つ許りの男の子。素裸のまま、右に箸を持つてる。臺所の方へと云つた所ですぐそこであるが、からさして来る五燭の電光で、私の顔を覗いて居たがすぐ引き返して行く、

「誰れ」

「どなた」男と女との聲が一時にきこえた。私はたまりかねて聲をかけて名乗を上げると、首席さんは慌て、立ち上つた。そしてそこらへ抜ぎすて、あつた浴衣を引つけて出て来た。話しが一寸長くなるので仕方なく上る。臺所の方から電燈をこつちの間うつさる、時に私はちらと覗くと、子供たちはみんな茶粥をす

すすつてる。チュウチュウと流動物をすする音ばかりがきこえて物を噛む音はしない。

流石にきままり悪げに子供の方をみては白眼をして居た夫人の顔をみると、私は何とも云へぬ感じがした。

無邪氣な子供たちはかまはずに音をたてる。

「お母さん、お粥も一つ」

體操が出来ぬ

某師範の生徒等が食糧粗悪のため遂に體操を休まねばならぬ事になつたと云ふ新聞記事を見た時、世人は一樣に眼をそばだてた。然し私共は今更驚かなかつ

た。私共の眼にはもうそれは餘りにありふれた事實であつたからである。
 何しろ朝夕粥をすつて居る人に取つては第三限以下の體操などとてもやれるものじやない。子供は活動の子である。

「や、體操、うれしつ」と云つて駆け廻つてまつてる。

「教室にはいれ、オイ皆教室にはいれ」教員室の窓から先生の力ない聲がする。

「先生、體操です」小兒等は異口同音不平氣に叫ぶ。

「何でも好いから教室にはいれちうに」

「先生、お話？」話ずきの子供があかるい顔してきく。然し先生の暗い顔は依然としてはれぬ。

「うるさい奴らだな。教室にはいつて居れ」すすすこと教室の方に歩を移して行

先生はやつと立ち上つて手のびをし乍ら。ふらふらと教室へ行く。然しもうお話を出来ぬ。

「今度は自習にする。お前等の好きな所を調べ。静かにせんといかんぞ」
 かくして再び教員室に歸つて来た先生。私は此の先生に怠慢の二字を與ふるに吝なるものではない。が然しかくせざるを得ざるに至らしめた或事の存在するを思ふと、あながちに此の人のみを責むる心にもなれない。

後任はだれ

S 主事の洋行も愈々近づいた。ストーブ會議は例の如く後任主事の問題で持ち

さりである。

「僕は東京のSさんだと信ずる」

「君、何か根柢があるかね」

「そりやあるさ」

「何、駄目々々。一度はさう云ふ話もあつたさうだが、むかうでもちやんと留學の番が來てると云ふじやないか。とても來やせんよ」

「さうかね。だが僕はちやんと或物を握つてるよ」

「何だい。云つて見給え」

「うん、云つて見給え」

「君は初めからSさんの主張者だね、どんな根柢があるか云つて見給え」

「じや云ふがね。實は此の間主事の机上にSさんから親展の手紙が來て居たんだ」

「何それが」

「それがつて、それからがまだあるよ。するとね。主事はその手紙を繰り返して見て居たが、やがて風呂敷の奥深くしまひ込んで了つたよ」

「ありや君、子供の世話を頼んだ手紙の返事だよ」と横合から岡君が一言にしてつき崩して了つた。

「さう云へば、此間宮城のKさんから電報が來たが、あいつ少し怪しいぞ」

「あ、あれか、あれは祝電さ」事務のT君は言下に斥ける。

「君、長崎のYさんはどうだね。あれならやるぞ」

「落第々々、柄でないんだ。」

「じゃ矢張り、京都かな。情ないね」

「京都だよ、もう君、ちゃんときまつて了つてるよ」

「天下廣しと雖も人材はないもんだねえ」

「京都だつて君人材だよ」

「君は初めつから京都黨だから」

「何、さう云ふ譯でもないが……」

「京都が來たら山川君は大賛成だらう」

「まさか？」

「Mさんも同勤だつたと云ふじやないか」

「さうだ、M先生、M先生。一寸まあ御出でなさい」春の低い主席のMさんはス

リツバをバサつかせて爐邊にやつて來た。

「一體Kさんでどんな人でせう、あなたはよく御存じでせう」

「さあ、僕も、もう十年から逢はんのだからね……」

若手のO君がどつさり石炭を放り込むと一しきりストーブは唸りを立て、燃え立つ。談は益々佳境に入つて、K氏の人物評に花が咲く、かくて爐邊會議は何時果つべしとも見えぬ。外には音もなく雪が積る。

藝妓をどうする

當番幹事I訓導は爐邊に居並ぶ歴々を見廻してやをら口を切つた。

「實は先頃略式ではありましたが一應の決議を経ましたので、もう改めて二度と

議する必要もない事とは思ひますが、ほのかにきけば先日の決議に多少御異議のお方もお有りのやうですから。」

「誰だい、そんな異議のあるのは？」出しやばりのS君はすぐに横槍を入れる。

「まあ、最後までき、給へ」とI訓導は左手で彼を制し乍ら語を續ける。

「改めて今一度、左様もう一度ざりですよ、又と御相談は致しませんから十分お考のある所を申しのべて下さい。よろしう御座いますか。」

「第一、場所は△△亭。」

「異議なし」

「賛成」

「第二、時日、△月△日、午後五時」

「よし、よし。」

「女の方よろしう御座いますか」女教員達は一同軽くうなづく。

「第三、會費金五圓」

「さあ、それが問題で」

「だつて△△亭で日本料理とするなら五圓がひけるかい」

「そりや君、樂隊の費用も入れてかい」年は若い額が禿上つてる事程左様に世故に長けてるN君が例の如く重く口を入れた。

「そりや、はいつてるさ」幹事の返事である。

「樂隊は何處から來るのか、誰か通人があるのか」

「樂隊が問題じゃないのか？」

「やれやれ、先決通り實行せ」

「原案に賛成します」男の方から頓狂に叫ぶものがある。

「楽隊なんか何するでせうね、やかましい許りでせう」

「さうね、電気館からでも来るんじゃないかしら」

「活動寫真でもあるのでせうか？」女の先生方はひそくと語る。

思ひ／＼に饒舌り出した。一寸纏まりがつきさうもない。

「諸君各自のお話はお止め下さい、此の楽隊に就てどうか御意見を承りたいですが」

「すると會費の件はもう、きまつたのか？」

「いやさうじゃないんだが、楽隊を入れるか入れぬかによつて會費がちがつて來

るんだから」

「楽隊に不賛成の者は意見を述べたら好いに」

「どうです、女の先生方？」彼は女の方へ向つて意見を要求した。

「楽隊で、あれの事なの？」先輩のGさんがにつこりしてうなづく。

「おや、さう、え——え。かつかつ／＼／＼／＼」と例の梯子笑ひに一

座のものをどつと笑はせるTさんの力も亦偉いものである。

先輩のGさんがお年輩柄意見を述べた。それによると別に大した反對と云ふ譯でもないが、自分共の同性の者が、目前に於て玩具のやうにされるのを見せつけらるゝと云ふ事は、實に自分共にとつての甚だしき侮辱でもあるし殊に先生方に對しても誠にお氣の毒であるから、只宴會の御世話をする位のものだつたなら何

も異存はない。然しこの藝妓共はさつぱり教育がなく。誠にだらしのないもの許りです。と云ふのであつた。之に對する幹事の説明が振つてゐる。

「Gさんは度々お出かけになると見えてよく土地の藝妓の事情も御存知の様ですが、(一同どつとふき出す) 私共幹事が其點はお引受けいたしますから萬事御心配なく御賛成下さい、それでは御異存の方は舉手を願ひます」と早や討論終決にして了つた。

むつくと立つたのは茶目のSである。「僕はそんな藝妓なら眞平御免蒙る。△△亭の女中で澤山だ」どこかで賛成と云ふ聲がする。

それからそれからと野次が出る。所詮口から先に生れた男共の事として議論すれば際限がない。

「一體當のお客さんたる主事はどう思ふだらう」と心配する者もあれば、

「いや、これは社會の問題になるかも知れぬ。新聞にでも書かれたら」とびくつくものもある。従來の例が出たり地方での話が例擧されたりストーブの火が消えて了つても容易に話はまとまりさうにない。

「何に、君、主事だつて男さ、まさか藝妓を呼んだつて怒りはすまいじやないか。」

「今でこそあつたが、あれでも若い時代もあつたし、そんな野暮でもあるまいよ。やれ〜」

議論は更に蒸し返された。

生れて三十年まだ藝妓にふれて見た事のない私、は此の光景をだまつてながめ

て居た。

三錢のうどんが一杯

「君、其れはいくらか」食パンの一片にナイフの先でバタをぬりつけて居たT君が、私にきく。

「これ、これは一つが三錢よ」

「餡がはいつてるのか」

「いや、これは味パンだ。うまいよ。」

「それ二つで好いかな。食パンに比べると、バタの代りだけが経済になるわけだな」

「とても君、これ二つでたるもんかい。足らなくつても我慢するさ」

「朝は粥だし、午はパン、夕方は外米ときてるから、もうとても二年と僕の體は續かぬよ」同じバン仲間のN君が相槌を打つ。

「君、うどんを食つて見給へ。随分くへるよ」K君が云ふ。

「うどん。僕はうどんだったらもう午後の仕事はなんにも出来んな」

「M君はあれでよく我慢が出来るな。M君と云ふのは創立以來勤績の訓導で、吾等の仲間では年頭である、今では郷里に家族を残し自炊生活をやつてる。」

「うん、僕か、僕のはこりや慰安だ。只何か物を口に入れたと云ふだけで好いんだから………食はなくなつて好いんだからね」

「ふうん」

どうかすると菓子好きの私は三錢の味パン二つでは我慢がしきれず、餡パンの追徴を命ずる事がある。

「給仕、餡パン二つ」この聲をきくと、きまつた様に女のKさんが私の顔を見て笑ふ。園藝のO君などは實習や何かで可なりに腹がすくだらうが何時も餡パン三つですましてる。

「僕は夜澤山食ふから、そりや夜は五つも六つも平げるからね」

「さうだ、僕等もその方だ。夜が落ちついて好いね」

私はさう云ふ話をきくと諸君の經濟のやり方のうまいのに感心して居た。共稼をやつてる私は諸君よりも可なり収入が多いにも係はらず一夜だつてさう舌鼓を鳴らす様な御馳走に預る事もなく、例によつて米七麥三の冷飯をいたゞいて

は物ほしさに食卓の傍を離れつらさうにして居るのが常であつたから。

藝がないから教員する

「君程の者が如何して教員で満足して居たらう？それが僕に取つては甚だ疑問だ」或夜私は同僚の岡君と身の上話を初めた。岡君は學校内きつての論客で、其の識見も亦時流を抜くもの、然も彼の家庭は巨萬の富を擁する秋田の鐵業家である。

「何、藝がないからさ」事もなげにかう答へて置き乍ら、彼はシガラの灰を落して語り續ける。

「そりや僕だつて、外の仕事が出来たら、何の教員などして居らう、實際教員

しなければ何も外に出来ないから仕方がないんだよ

此の一語は僕をして少からず異様の思ひをさせた。僕は今の今まで彼こそ實に眞の教育家であると思ひ切つて居たからである。眞に教育を愛し此の道を楽しめるもの世人の所謂天職を以て安んずる者と信じて居たからである。

『それで教員で満足してるかい』

『無論さ、かうなつた上は自分の行く可き道に樂みを發見しなくては生きて行けるもんじやない。僕は一生教員で終るのだ。も少したつたら何れ郷里に歸つて、郷黨のために働いて見ようと思つてる。』

恒産ある彼として初めて此の言がある。

『僕はこれから一奮發して車でも引張つて勉強したいと思つてるが、君は又どう

して師範學校位で満足してるのか』

彼はぎくりと大きくうなづいて美しい眉尻を上げた。

『それには極めて深い理由がある。何僕だつてせめて高等の教育位受けてみたいのだ。然しどうしても僕の實父が承知しない。それは恚う云ふわけだ。詳しく話せば随分面白い話だが、要するに僕の兄たちが皆高等教育を受け乍ら父の満足する様な結果を得なかつたと云ふのが其の主なる原因だね。中兄など大學を出ながら今以て月々小使を貰はなくてはやつて行けぬし、上の兄に就ては又極めて小説的な失敗談もあるしね。それやこれやで、僕の願は絶対に退けられた譯さ』

『これからでもまだ遅くはないじやないか』

『さあそれがさ。君知つてる通り、僕は養子だらう。で父が云ふにはだね。若し

たつて高等の學校にてもはいるなら、離縁をしてからにせよ。先方にまで迷惑をかくる様では俺の顔が立たぬと云ふんだらう。まるきり迷惑があるものにきめてるから仕末が悪いさ』

『なる程』

『僕だつて、もどかしくて堪らんけれどね』

文相の賢明にまつ

『君のやうな家に生れ、君のやうな頭のある人ばかりが小學教員をすると云ふ事になつたら、誠に天下國家の幸福だけれどね。』

『上げるなよ』

『上げるのじやない。實際だよ。現在教員してる多くの人々は第一金がないから、第二能がないから、第三意氣地がないから、止むを得ず教育界に残つてるのだからね』

『人間の滓ばかりが残る譯だね』

『誠に君、國家の一大問題じやないか』

『さう思ふなら君のやうな有爲な士が教育界を去らずにもつと踏止まつてやつたら好いじやないか、ハハハ』

『上げるなよ、ハハハ、脊に腹は代へられぬと云ふ處だな。實際、これじやとて我子の教育が出来ないんだもの』

『本來から云ふと教員なんて、男がする仕事じやないね、女子で澤山だ。何も男』

でなくちや出来んやうな事はないからな」

「務まるは務まるが其の結果はどんな事になるだらう。見給へ、學校でも女の生先がやつてるクラスの成績はどうだ」

「さうだね……困つたもんだね」

「將來の教員問題は根本的に考究を要するね。現に今度向ふの學校で二部生を募集したら四十名の定員に十二名しか志願者がないと云ふんじやないか。再募集に手をつけてるさうだが、それでもさつぱり集つて來ないらしいよ。とてもこれから教員するものはない事になつて了ふよ」

「困つたもんだな。誰かの話にあつたかと思つてるが、かうすると好いだらうと思ふ。村の金持が、相當の家柄の長男株のやうなものに師範教育を施しておい

て、それに位をくれるだね、丁度一年志願兵みた様に、そして國家が相當の待遇をすると云ふ風にしたら好いよ」

「駄目だよ、位よりも矢張り金さ。今時分正八位など有難がるものがあるかい」

「さうだね。矢張り月給問題が根本だね」

「行き詰る所まで行つたら、どうかなるだらうよ。殊に今の文相は賢明な方だからねえ」

「さうだ。中橋さんは屹度何とか解決をつけるだらう。吾々がこゝらで氣をもんだ處で仕方がない。これは賢明なる文相の力にまつ外ない」

コップに残つたビールは泡も消えて生ぬるくなつて居た。私は星を仰いで彼の宿を去つた。今まさに教育界を去らんとする私、私は果して藝がある男であらう

か。

『藝がないから教員する』私は口の中で幾度かつぶやいた。

焼石に水

經濟の第一義は現金拂であると云ふ事は百も承知であるが、悲しい哉一ヶ月向ふに押し延ばすだけの餘裕がない。取ると出すのとが殆んど同時に、會計から俸給袋を受取つた瞬間だけが、自分のもの、次の瞬間にはもう、あれこれと支拂の事が氣にかゝる。其の中に續々とかけ取りがつかけて来る、現金なればこそ節約もするが、今直接自分の手から金を出さぬと云ふと、まるで人でも出して呉るゝものゝやうに思はれて、無暗と奢りやすい。その結果が靚面、俸給日に表は

れて来る、全部支拂がすめば先づ一安心。だが中々すまない事が多い。

『濟まないが此月は大變拂ひが多いが來月にして呉れ』

『へい、よろしう御座います』

初めの中は雜作もなかつた。一箇所二箇所と來月にして呉れが殖えて來た。來月が來々月になる。先方でも吾々の内場の苦しい事は十分知つて居るのだから滅多に矢釜しくは云はない。それだけ自分の氣がとがめる。今月は何とかしてあれを拂はなくてはならぬと無理算段を初むるがさて中々に好い工夫もつかぬ。

今日は俸給日である。内を出るまでその事が氣にかゝる。鐘が鳴るまで。教壇に立つまで依然としてやりくりの工夫が頭を除かない。恚うした頭の持主から教はれる兒童の純な心が痛ましいではないか。

『一帯外の人はどうして遣り操つてゐるだらうか、餘程經濟が甘いと見える』人の事を羨んでみるが人も矢張り同じ事。二割増俸があつた頃
『有難いは有難いが焼石に水だ』と皆いつて居た。してみると自分許りがさうであつたのではなかつたわい。

裁縫研究會

型の如くに三十の頭が並ぶ。やをら着席したマスターは、押し付ける様な調子で『中食後の勉強は止めさしてほしい。それから如何しても騒がしくて困る。學級的に活動してる時には多少の聲を出しても好いが、なるべく静かに學習する習慣をつけてほしい』と云ふ二の希望なり訓示なりの意味のものを述べて。さて、

『それでは批評會に移ります。先づ今日の教授者から……』と當日の教授者の方をむいて着席した。當日の教授者と云ふのは、マスターが次から次へとつれて歩くと稱せられて居る女教師で、所謂個人的學習法の妙を得たお得意の女であるさうである。此度もマスターの來任と共に、無資格者であるにも係はずこの裁縫主任として來任したので。そこに何等か多少のわだかまりが出来たらしい。

『S氏が自己の藝術觀を事實に表現せしむる爲に△△子と云ふ女優をもつて居た様に、マスターは自分の教育觀を實現さす爲に彼女を有するのである』と、ちとうがちすぎた觀察を洩らすものもあつた。
『大變に混雜しました。何が何だか分らぬ授業をお眼にかけまして』と謙遜し乍ら教授者のOさんは二三の説明を付ける。ニッケル縁の眼鏡をかけた四十女。そ

の眼は半うつむき加減であつた。

何處も似たものであらう、女の教授に對してなど誰も餘り批評などするものではない。ましてそれが裁縫ときてゐるから。それに今日のはマスターの説を實施したと云ふ様な譯で、とても誰一人文句のあらう筈はない。と教授者のひさんが高を括つたか、括らなかつたか、そこは本人でなければ分らない。まぢかねたと云はぬ許りに茶目のSが起立した。

「質問します。一體、あゝ云ふ風に部分縫だけやれば徹底するものですか、私共にはどうも専門の事はさつぱり分らないですが、あの襟心の處などはあのまゝで別に總合した取扱ひなさらないですか、それから今一つは……」

「おい〜。細君から教はつて來たな」

隣席のN君がSのズボンを引きつて呷く。

質問に對して教授者は別に答へなかつたが、マスターが代つて、

「君の云ふ部分縫と半身縫とは違ふよ。半身縫は部分縫じやない。總合縫と同じ事だ」

「いや違ひます、今お尋ねする通り半身縫をやつただけで、襟心の入れ方が出来る様になるのですか？」

右端のI君は開會數分、もうすつかり眠り込んで了つて、兩手を机上にのせたまゝ、頭を垂れて好い氣持になつて居る。

常設批評家の稱あるI君が他人の質問應答中から立ち上つて、まつてる。

「え、女單衣と男單衣の區別に就てお伺ひしたいですが……」

『え、分ります。女の單衣は第一身丈が長う御座いますし』
 答はぼつり／＼と出る。それを丹念に筆記してゐるのは何事にかけても入念なG、
 S君。右手で鼻をつかんだまゝ、眠つたやうなI・K君、敷島の灰を茶碗にはたき落
 しては何か考へ込んでゐるG・S君、自分の名札をいちつては答辯者の顔を覗き込
 んでゐるK・T君。校長の稱あるS・O君は両手を机上に組んだまゝ、ばかりと眼を
 開いて一同を見渡したが、二十秒と経たぬ中に又ふらりと十度許り頭を下げる。
 五秒ばかりして又十度ばかりさげる。次に又十度許りもふらりとやつたかと思ふ
 と、今度は思ひ切つて一時に二十度全部ぐたりと下げて頭を机上に打ち付けたか
 と思ふと、確實に四十五度に背を枉げて了つた、そして間もなくスウ／＼と云ふ
 微かな聲がもれて来る。此のあたり未だ今日の雲行分らないのであつたと見え

る。
 此の間にもM・T君のむづかしい質問は續く。答辯者がだん／＼窮して來ると。
 N・Mさんやマスターが横合から説明を加へる。Y・N君又曰く
 『説明者が多い』
 此の應答振からするとマスターの意見をきくのは全く本日の教授者の説明をき
 くと思つても好いらしい。
 Y・N君が半身縫の缺點如何と云ふ質問を發した時に、答辯者は、
 『それはマスター先生にお聞き下さい』と語尾を濁した。すると彼は
 『いや。あなたの意見でよろしい。今日は。マスターの意見は又伺ひますから』
 とはねつける。次にM・T女教員が問ひ初めた。すると問ふ事も今までの

七むづかしい事に比べて了解し易いからかも知らんが。今までより餘程景氣づいた調子で例の『ふうん。ふうん』と云ふ鼻に廻る返辭が度々出て来る。そして眼がはつきりと相手を見詰めてるのも面白い。

I・K 君は例の如くに隣のH・Y 君に筆談をしかけた。北側の筆頭に座を占めたM 教諭の天神髻が眼目端座してる。反射してさし込む夕陽にふれて。其の金縁が光る。ねつちり〜と質問が一時間半も續くと。皆の顔色に多少倦怠の色が見え初める。

『もう御質問はないですか』

『いえ。も一つ』

『え、一寸』二人が同時に立つたが。譲り合つた後でM・H 君がやり初める。

『N 君は理由は入らないと云ふが？ 私』

『オイ〜、誰がそんな事云ふた。くだいちやないか、この忙しい世の中にみんな俺の云ふた處をくり返してる』N 君はつぶやく。

K・T 君は机上にお茶をこぼして。それを指先でかき廻し乍ら落書を初めた。

H 君はマスターの方に向き直つた。

『何時か先生のお話に現在四年かゝつてやつてる事は一年で出来るよと云ふ様なお話がありました。それとこれと何か関係がありますか』

『ハハハ。それは少し話が大げさだが。それはね。それは大體慙う云ふわけだが

.....』

此の間にも主席のM さんは度々立つて教授者の爲に辯ずる所があつた。

K T君が家庭の裁縫と學校のそれとの關係に就て押問答を初めてると、小使室の時計がボン／＼と五つなつた。まだ／＼質問の部である。此の會議は何時果つべしとも見えぬ。Sは再び立つた。

『先生のお話振をきいて居ますと。大體に於て今日の授業は先生のお考へを實行されたものらしいが、平素先生の御主張なさる個人的自發的學習と云ふものは大體あんなものであると思つてよろしう御座いますか』
笑ひ聲が一度にどつと起る。

『何も笑ふ事はない。實際吾々はさう云ふ事を非常に知りたいたいと思つてるじやないか』とSは一同へ向つて云つた。

『まア。極く初歩のものだね。階段ならば第一段だね。まだずつとよくやるよ。』

尋常二年位でも。ずる分よくやるからね。こゝのはさうは行かんかも知れぬが』
Sは尋二の擔任であつた。

やつと批評に移つた。何時もいの一番に立つMT君が一寸控へてるとH君が先に立つ。次でT君、それからそれと批評が出る。批評を聞きうるマスターの様子はと見れば、右腕をV字形に曲げて、拇指と人指とで鬚を撫る。左腕は肘から先を机にのせ。右の拇指が鬚をいぢるのと代り番に左の中指を動かす、びく／＼と半殺にされた蛇のやうに。眼瞼がびち／＼と二分ごし位にうごく、机上に落した眼には生氣がない。

立ち上つたMT女教員が早口で滔々とまくし立て初めた。

「……であらうと思ひます。然るにそれがなかつたと云ふ事が一つ。木綿としての取扱。イークオル單衣物の取扱としては不十分であつたと思ひます：……さう云ふ事を今一年生に要求する事は無理であるとおつしやるかも知れません。……事實一番こちらの……」

小學校でさへもそれ程迄徹底した處まで行くんですから……それが二つ、あ、云ふ風な取扱ではとても呑み込ませると云ふ事は云々。もつと頭を作つて此の布の斜線と直線とは如何云ふ風に……要するに分らず了ひになるんぢやないかと思ひます。」

隣席のN君が氣を利かしてお茶をついでやつた。けれどもそんな事は元より氣もつかず、やるはく。滔々數千言、まくし立て。まくし立て。机を叩く、手眞似をする。「頭を作るなんて云ふ事はとても出来ない。布の上下の關係と云ふもの

は殆んどはいつて居ないではありませんか。……けれども半分は足らない指導でありませう……」

腰を下すと。マスターは

「今の事は。あなたがやれば何年位に出来るのか」と冷然と問ふた。

平然として又數十言を述べ返すと。

「理論は結構だが實際行きますか」と聞く。

「はい行きます。四年ならきつとやつてみせます」

蓋し多少の痛快を感じたものが可なりあつたらしい。

「辯じ終つて、先の茶をぐつと一杯、續け様に又なみくつとつぎつ、隣のN君に、

『云ひすぎましたか？』と小聲。

『いや。感心してきいてた』

入れ代り立ち代りの批評に。教授者は只黙念として眼を卓上に下したぎり、動かうともしない。

私はこの人と彼のマスターとの心中を想像して様々な感じが湧いた。二人はまさに被告扱にされつゝある。殊に裁判長であつたマスターが、半頃辯護士となり然して終に被告となつたを思ふと感慨殊に深い。

最後にマスターの辯解のやうな説明のやうな話があつたがそれは恐らく何人の頭にも大した感動を興へなかつたらう。時計は七時をさした。夕映が二階の教室の窓にはえて、うす暗がり窓先に迫る。ポールドを背にしたマスターの顔の影

がうすい。反対の側に並んだ人の顔はもう見えなくなつた。それでも又新しい問題が提供される。論客のH君がとある問題を捉へてマスターに迫撃する。とうとうガスがついた。うすぐらいガスの光りでは思ふ様に筆先もみえぬ。あちこちと便所に立つ人がある。議論は刻一刻に深刻にそして鋭くなる。相手の一方がたじたじと路次の奥に押し込まれて行く様な心地がした。

『Tさん、今日は金鵝勳章だよ』

『僕すつかり参つて了つたな』

二三人の教員が裏門を出て話し乍ら行く。空には星が……

怠け者の手あそび

六月五日。今日も亦研究会。

今日の教授者は先日批評の花形であつたMT女教員。定めし復讐戦があるだらうと。開會前から力んでるものもあつた。

『覺悟の前です』T女史は自身でも期する處ある如く着席した。然し豫想は外れて事は案外に平凡であつた。

MTさんの説明は例の如く滔々たるものであつた。その中に教材の選擇に對して、袋物を入れる、か否か、前にマスターが何とか云つたとか。そんな事に就て論及した。その語氣が一寸凄じかつたので。後でT君の質問あつた機會に、マスター

はや、怒つた口調で何とか辯じて居た。

女から見れば屁でもない事だが、皆目豫備知識のない男教員にとつては何が何だかさつぱり分らない。それにまじめ腐つて會議に列する。下らぬ質問もする。中には大に下る質問もあらうが、何だか共鳴する事がない。

N君とSとは、法令全集をもつて来て、退隱料やら、退職給與金の事に就て調べ合つて居た。

空は重い。私の頭は鉛を流した様に重かつた。會議の問題に就ては全くふれない、退職賜金が一切合切で百三十圓をこら、それじやモーニング一着しか出来ない、みじめなものだ。十年の功は只此の百三十金を以て酬ひられるのであるか、Nのやうな貧弱な市の市長でさへ一期をこらのつとめで一萬金の報酬を克ち

うると云ふのに。丁稚奉公も十年すれば一寸したノレン位わけて貰へる世の中じやないか。

T君は依然として論を續けて居る。

「袋物を作るに標本は入らない、標本あればこそ低級な模倣に墮ちて創作が出来ない。標本は各自の頭に在る、自己の作らんとする必要要求に考へて夫れを適應するものを拵へなくてはならぬ。即ち個々夫れに應じたるものが必要であるではないか」と云ふ。例の如く純理想論。

N君「標本は絶対に不必要か、若しさうだとすれば文化の進歩はないじやないか」

M君「人格修養に資する爲偉人の傳記をよむ事は如何」私も氣まぐれに意見

をのべる。

「女の先生は廢物利用と云ふ事をどれ位價值のあるものと思つてるのか。古い、何時迄も古い、因襲的な考に囚はれて將來の家庭改良には一文の價值もない仕事をば、廢物利用と云ふ似而非美名の下に、何時までも下らん事ばかりやつてる。そしてそんな事をやるのが如何にも賢婦人で、もあるかの様に思つてる。そんな様だから、何時迄立つても女の頭は出来ない。私とても廢物利用の全廢論者ではない。五月雨の夜のつれづれなるまゝに、ネクタイのはしきれを用ひて一寸名刺入れを作つてみると云ふ一種の趣味からやるのならば、ともかく、育児日誌の一枚も記さない女たちが、廢物利用など、終日下らん事にかきくらすのは誠につまらない。だから廢物利用は實用の問題ではなくて、趣味の爲のものでなく

てはならぬ。實用の上から云ふとあんなものは買った方がズツとやすいじゃないか。』と。自分では可なりメートルを上げたつもりだ。それから可なり長い間論評は続いた。私は興味を失つて了つた、そして私の頭には同僚の様々な姿が浮んで来た。

雨のふる日など〇君はカーキ色のコートの上に蓑を着、笠を被つて中庭の土をいぢつたりして居た。日曜日でも大抵は學校に出て来て、何か知らコツ／＼やるのが此の人の趣味であり、それが又、此の人の美しいところである。不恰好に腹をつき出して移植鋤を握つたまゝ、教官室にやつて來てる事もあつた。

K 主事が來てから、食堂の話が長くなるやうになつた。と云つても皆のものが面白く話し合つてるのじゃない。子供の看護やら、參觀人の應接やら何やかやで

大抵は五分か十分の雑談で行つて了ふ。毎日後に残るのは主席のMさんと主事と二人ぎりである。そしてMさんは鉢に残つたパンの滓を何時までもいぢり乍ら、背を圓くして、ヒソ／＼とさゝやく。主事は右腕を卓上にのせ、後頭部をそれにまたせたまゝ、軽くうなづき合つてる。午後の授業が初まつた後までもそゝめき合つてる事すら少くない。

法隆寺から汽車通勤をしてる畫家のK君は大きな特別誂のズツクのカバンを呑氣にかけて來る。それが随分便利ださうなが。

背廣の前が折れ重なつて大きい腹が出様々々とする。少し伸び上つたりすると、チヨツキとズボンとの間から、白いシャツがはみ出して、大きな腹が波打つてるのがみえる。この君はこれで居て中々の藝者で、宴會の時にはなくてならぬ

人である。

皆のものが果してどれ程の精神生活をしつゝあるだらうか彼等の多くは毎日どんな問題を考へつゝあるか。話と云つてもこれと云ふ問題はない。議論は随分あるが教授法の一部に限定されてる。同じ教養の問題でもなぜもつと人生にふれて来ぬだらう。美の問題や生の問題に何故もつとピッタリとふれて来ぬだらう、何だか第二義的或は第三義的などころあたり問題が低迷してるのを思ふと情なくてならぬ。

私は田舎の教員生活が、そんな點に不満な爲にやつて来た。こゝらに来たらもつと話せる人も多いだらうし、生きた人もあるだらう、そしてお互にそんな生活の仕方をしつゝあるのだらうと思つてきた。それに今や失望の中にこゝを引さ

あげなくてはならぬ事になるかも知れない。光の巷へ。

三時に初まった會議は今やうやく終末に近づいた。主事は總評をやつてる。私はこの三時間の間に於て廢物利用問題に共鳴したゞけて、その外は數千言、皆沒交渉であつた。怠慢を敢てした私が悪いのか、慙うさせる此の空氣がいけないのか、それは私には分らない。然し私のやうな者は矢張りこんな空氣の中に永住する事は許されぬだらう。

一頃私は此の空氣の改造に努力した。同僚の誰彼とそれらの點に就て話し合ひもした。然し總ては空しなつた。SやNやTや随分と話せる人もないではないけれど、矢張り總ては空しなつた。

此の前の研究會であれ程まで叩かれたKMさんが、今日はその當の敵たるTさ

んの教授に對して一言の論及する處ないのは矢張り黒い。これが若し敵打ちのつもりで、滔々と巻返したら、もう駄目かも知れぬ。否さうあつたら随分可愛いところがあるんだけど。一言の發するところないのは流石々々々？

六月の中旬

又例のだらり〜牛涎式の會議があつた。Sは相變らずノートの端に徒がきを初めた。

●

六月の半、梅雨の空鬱陶しくして、

重き夕陽は會議室の窓にさせり、

三十の頭顱、口角泡を飛ばす此れ何事？

試験の可否、人物の評價、

論旨は堂々として泰西の學者を凌げども、

詮じて得る所それ幾干

左側の第一人者短倭の森口君が、

吐き出す淡き朝日の紫煙の如く、

論、去ればまさに残るところ、此れ空、

● T と H

Tは常に我が論壇の勇なりき

燃ゆるが如き革新の意見は

彼が五尺の身軀にて充り

『個性の伸張、創造の生活』

之れぞ彼が主張の根本義なり。

言は聊か濫にして、發音は時々明快をかけども、揚快把羅、論じ盡さずんば止まず。

Hも亦、我論壇の珍なりき、

白晰の面貌宛然女兒の如くなれども

彼が紅唇一度破るれば（眉宇頻りに動きて

先づきく者をして耳を聳てしむ）

突如 敵の心核をつき

一舉にして之を睹らずんば止まず。

TもHも共に之れ東北秋田の産

朔風嚴霜偶々以て此の如き論傑を作りしか？

此の後の詩に對して隣に居た例のアイが次のやうな樂書を加へた。

論ぜんために生きるのか、生きるために論ずるのか。

此處に思ひを及ぼせば、彼等も随分愚物なり。

女郎教員

女郎教員と云つた所で、女郎が教員してるじやない。又女郎を教へる先生の事でもない。女郎のやうな先生だと云ふ事である。

何が女郎のやうだと？ 其の扮装？ いやさうではない。立派な男一匹であり乍ら、女郎の様な不貞腐れな根性の教員を云ふのである。どこにそんな教員があるかつてすまないが初等教育の奥の院に。

びつくりしちやいけない。かく申す私自身の事だから敢て人様の事を悪く申上ぐるのじやない。

『朝に越郎を送り、夕に吳客を迎ふ。私共の生活は全く女郎の様なものですよ』これは私の信頼する某教員の話である。さうすると女郎教員豈夫れ我輩のみならんやだ。實は女郎教員と云ふ名そのものが、外からいたゞいたもので私

の獨創じやない。

『え、今日の教授では特に劣等兒の救済に力を用ひましたので……』
相手が田舎者とみれば、後の説明で煙に巻いて了ふ。

『は、あ来たな。今日の參觀人は一寸ハイカッてるぜ、道理で師範の訓導だな。よし、よし、それでは此の手でやつてやらう』彼は胸の中でちやんと腹案を變更して壇上に立つ、そこは流石に術の先生、バラバラバラと得意の分團式教授か動的教授か、參觀の先生眼をバチクリ、なある程甘いなあ！

『はあ、新讀本の取扱ひに就てですか、え、新讀本の特徴は
『なある程』』

『ハイハイ。あなたは綴方の系統案に就て。は、さうですか。よろしう御座いま

す。拙著綴方教授法はお読み下さいましたか、はあ、さうですか、お序の時に御一讀下さい……』

『是非一つ拜見いたしたいものです……』

『おや又來たな。此度のは、あ、郡視學だ、よし、よし、こ奴を虜にしといた、此の夏は又講習の口が一つ殖えるぞ。うまいもんだ』

先生の面に喜びの色がさつと漂ふ。

『や、ようこそ』

『誠に感心いたしました。私共迄もつり込まれてしまひました』

『いやどうも。元來創造的の教授と云ふものは』

前は禿てるが後は張つてる。この頭には随分いろんな智慧がはいつてると見え

て、お客次第でどんなものでも出来る。識見該博、談論風發。行く所可ならざるはない。これを以て高師訓導氣質と稱すべきか。否々、そんな事云つたら、どんな叱言戴くかも知れない。たまにはさう云ふ人もあるだらうとお茶を濁して。それから先は參觀のお方の御推斷に任せませう。シツ？

良心を傷くるから去ります

突然、S女教師が轉任になつた。實に意外である。これには何か深い仔細があるに違ひないと、例の岡と大山とが男のくせに其の下宿に押しかけた。

『Sさん。どうした。餘り突然じゃないか？』ぶつきら棒の二人である。そこに何の障壁もない。Sさんは美しい犬齒をちらと見せて、につこりしてる。

「今お茶を上げます。どうぞゆつくりと」

「何、お茶なんぞ入らないよ。話しがききたい」

「二帯何か不平でもあるのかね」二人が矢つぎ早に云ふ。

「いや、決してそんな事では御座いません。皆さまから御親切にして戴きますので、何時までも御厄介になつて居りたいとは思ひますけれど」

「思ひますけれど何だ」

「お嫁に行くんだね？」

「え、え。お嫁さんにも行きませう」器用にお茶をすゝめて、Sさんは、二人の前ですゝみ出た。

「戯談はよしにして何か理由があるだらう話しておくれ、何彼と學校の参考にな

るしね」二人が眞面目にかゝつてきゝ得たるは教師の答は恚うであつた。

「自分は茲に居る爲に何れ位、自分の尊い良心を傷つけつゝあるかも知れぬ。心にもない偽りの手段を弄したり、いけないと知りつゝも參觀人の見場を繕ふ爲に其の場限りの出鱈目をやつたりすることはかりが多くて、とても自分の純なる心そのまゝを教へ子にふれしむる事は出来ない。昨日も今日も一昨日もと次から次へ新しい參觀人が来て、何物かを得ようと私のつまらぬ授業をみつめてる。平凡な事をして居てはその人に對してもすまぬ。否、平凡な事では業中にすうつと抜けられて了ふ。それが私には又なく苦しい。何だか甚だしい侮辱を受けた様な氣がする、その苦しみを受けまいとならば、多少なりとその參觀の客の心に投ずる様な教授をしなくてはならぬ。人の心を忖度して、人の氣に入る様にして行か

ねばならぬ。その墮落した心を私は悲しく思ふ。憊うした生活を幾年か續けてる内に私の良心は麻痺して了ふ。それが私は恐ろしい。私はこれからお嫁にもなりたいし、兒の母にもなりたいですもの』

二人はSさんの話をきいてすつかり參つて了つた。そして頻りに頷いてると、Sさんの話は急に結末に近づいて、話題は鋭く二人の頭上に投げつけられた。

『あなた方は疚しいとはお思ひになりませんか？』

實際その時程自分からはづかしいと思つた事はなかつた。男二人がまさに女人から嬲られた趣であつたと、岡は當年を追想して私に物語つてくれた。

村會議員になつた友に共鳴す

村會議員！何だ村會議員輩に迄など、一概に侮蔑の眼を以て之に接する様であるが、それは現在の議員そのものが比較的無智な人を以て充たされて居るが爲に世人がさう云ふのであつて、村會議員の仕事そのものがつまらないのではない。

石田君。

僕は君が多年の宿志を達す可く此度村會議員に打つて出たと云ふ報知に接して君のため、はた教育界のために秘かに喜んだ。君は今まさに君の宿志を達す可く其の第一歩を踏み出した譯である。然り村會議員は政治家の一年生である。ではあるが一村の政治に關與して巧に之れが成果を收めうる人才であるならば任に一國の政治に就いても必ずや相當の美果を收めうる人と信ずる。低級な、無知な議員で充たされて居る間こそ村長の獨斷で大した不平もなく行つたもの、今日はも

はやさう云ふ時代ではない。君のやうな智識階級の人が村治の爲に盡すと云ふ事は形に於て既に村政の一大進歩であると云はねばなるまい。

石田君。

村の校長も考へ様によつては慥に好い。然し僕等のやうに一生働いて働いて働いてきぬいてみようと思つてるものゝ爲には、その仕事之餘りに隠居じみて居る。餘りに人間離れがして居る。體の一部分には血が循つて居ないやうなお方でも勤まるやうな仕事に、可惜人才が呑氣に之に従事して居られやう筈はない。さうだ校長さんは全く隠居仕事だ。僕の友だちの中にも恩給でも貰ふやうになつて、もう思はしく活動が出来ぬやうになつたら郷里へ歸つて校長さんにでもならうと云つてる人が澤山ある。若い人は皆さう思つてる。村の人なども又さう云ふ風に考

へて居る。さうでなければ巧く勤まらないと云ふのが現在の状態だ。もう先が伸びない芯の留まつた人のする仕事に、君のやうな未來ある人が何時までも従事してるのじやない。僕はその中に君が俗化され同化されて愈々校長然たるものになつて了ふのだらうとそれ許り心配して居た。

果然。君は村會議員となつた。水飲百姓など、稱せらるゝおめでたいお方々と共に村政を議する事となつた。事そのものを僕は祝福せずには居られない。

十の力ある人が六か七位の仕事に従事するのは決して憂ふ可きではない。六の力しかない人が十の仕事に従事するのが危険である。然も現代は滔々として然りである。君が今あり餘る力を抱いて村會議員となつた事は誠に一代の卓見であり、非常なアイロニーである。幾干もなくして君は郡會議員たるであらう。然し

て又人材缺乏の△△黨は君をして必ずや縣會議員に推舉するに違ひない。遠い例を引くまでもなく現縣會議長△△氏がまさに其の例だ。君の識見君の才幹は△△氏に比して遜色あるを見ない。必ずや君が△△氏に代つて縣會の牛耳をとる日が来るであらう。然も前途は尙洋々たりだ。そこだ。そこが一廉のたのみであるはないか。

大政治家を以て目せらるゝ井上角五郎氏も奥繁三郎氏も、元はこれ一介の小學教員、三土忠藏氏も元を質せば中等教員。教員にして一國の政治舞臺に立ち遂に彼の如き地位を克ち得たものがある。僕は君が研讀倦む事なき努力と、祕かに膽略を練つゝあるその修養振をみて、他日必ずや日比谷の活舞臺に立つの日あるを信じて疑はない。あゝ榮ある君の前途。

真によく自己を知るものは只自己あるのみだ。君自ら決心し、君自ら選んだ道に誤りがあらう筈はない。君は僕の意見を徴するが、それは要するに参考にすぎずして、君の考を根本的に覆へす力のあるのではない。然し乍ら君の考と僕の所思とがまさに符節を合するが如くであつた事を喜ばずには居られない。

腕を延ばせば天井につかへる。足を撥ぬれば壁にあたる。少し大きな物を云へばわん／＼と反撥してやかましくて仕様がなない。寝返り一つ思ふ様にはうてない世の中、こんな窮窟な世の中がどこの世界にあらうか。登らうにも梯子がない。頭はすぐにつかへる。行く先は見えて居る。どれ程の腕があり、どれ程の力があつても、より以上の域に達する事の出来ない教員社會に、何時まで居つたところて夜が明くるものではない。然り教育界は政治界と比べものにはならない。教員

は村會議員にも劣るものである。僕は君の英斷を祝する。君の前途を祝する。
石田君。

國家は益多事である、教育問題は事實に於て國家の大問題となつて了つた。敵も味方も教育問題を提げて驅逐するの現状、誠に痛快ではないか。教育界が活氣だつのはこれからだ。教員が人間並に取扱はれやうとする緒が見え出したのだ。僕は切に望む。君のやうな田舎教員の經驗ある人が、議政壇上大に教育界の爲、教員のため眞摯熱烈の辯を振はれん事を。然り、かくてこゝに久しく封じ込められた我が教育界に明るい一道の光を投げ込まれんことを希望して止まぬ。至囑至囑。

放課後の職員室

一週一度の職員會ももう久しくない。研究會は何時からか止んで了つた。教案などは誰一人書く者はない。隙が多くなつてテニスがやれるのだが、ボールの音をきかぬ事も久しい。

『やつと米二升だけ稼いだ』憊う云ひ乍ら次席の山岸君はがらりと宿直室の戸を開けた。そこにはもう若い男教員たちがごろ〜と寝ころんでゐた。或田舎町の小學校に於ける七月のある日のことである。

『校長はまだ居るか』

『まだ〜』

「何ぐづろ、してらだらうね」

「何、居たつてかまふもんか」

「あんな帳簿ばかりいちらんと、もつと月給上ぐる工面をすれば好いにね」

「あれでも可なり骨折つてららしいよ。矢張り町長が悪いんだね」

「役場の奴等はみんな相氣ばかりしやがつて仕様がなないんだよ」

「此の間だつてさうだ。収入役の云ひ草が癩に障るじやないか。教員位結構なものはない。鼻たれ小僧相手に二三時間ちよこくとやつて三十圓も四十圓もとる

くせに、又候二割増した。随分蟲の好い話だて云ふんだらう。」

「何、彼奴何時もあんな事ばかり云つてるよ」

おどくと教員室の方はかり氣にして居た検定上りの老先生は、校長の影がち

らと門の外に見えるが早いか「お先に」とさつさと歸つて行く。先生は歸るなり早速畑の手入れた。今年は茄がよく出来て、一寸十圓も上つたさうだ。

「僕なんざ、野菜作るにや畑はないし、田の草とりには雇ひ手がなないし、宿直室の厄介になつて番茶でもすゝるより外仕様がなないわい」次席の山岸君は盛んに氣焰を吐く。

「一帯郡視學も無能だよ。△△でも□□でも五割出してゐるのに本郡許り何してらだらうね、僕が視學だつたら思ひ切つて六割にも七割にもしてやるんだがなア」

小使室の時計がボン／＼と四時を打つ。あふ／＼と生欠伸ばかりかみしめて馬鹿話は何時までも續く。

恚うして貴重な時間は過ぎ行くが、時間などは少しも惜しい事はない。今の内

にうんと遊べ、遊ばぬ者が損だと云ふ考へが皆の頭の中に躍つてゐる。資本主が労働者の機嫌を取る世の中だもの、校長が部下の機嫌をとる位何でもない。授業外は一切の仕事を放擲して了つても尚且つ足らぬ有様。自墮落放縱の中に彼等は青い不平の息をついて行く。まさに教育界のサボダージユだ。

生活問答

私は此八月東京に於て△△縣の田舎から出て来た一人の若い教員に逢つた。さうにかゝぐるのはその教員との問答である。

「卒業以來何年になるのですか」
 「三年目です」

「俸給と手當でいくら貰ひますか」
 「三十圓です、五割になれば三十六圓になります」
 「それで足りえますか」
 「足らぬ事はありません。下宿料が二十三圓ですから七圓は餘ります、その七圓で一切合切をやつて行きます」
 「いくらか貯金が出来ますか」
 「どうしまして、先日夏服を作るために親父に十五圓の無心を申しました」
 「洋服などみんな作つてますか」
 「とてもそれは駄目です。大體この二三年は洋服作る人はない様です。冬になるとみんな震へて居ますよ。私共は卒業の時親から作つて貰つたのでまだ着られ

ますが。五六年にもなる人のは大抵破れ服です」

「食べ物は大抵どんなものを食つて居ますか」

「普通麥です、麥七分に米三分位の割ですね」

私はつい此頃稻垣乙丙博士が米七雜三主義とかを鼓吹して居られる事をきいた。又文相の食糧問題に關する訓令もみた。今此の教育者の話をきいてそれらの事を思ひ出してをかしくて堪らなかつた。

「おかずにどんなものをたべますか」

「朝は味噌汁、晝と晩とは揚げ豆腐（油揚げ）に野菜位でせう」

「時々は肉類をたべますか」

「絶対にないと云つてよう御座いませう。まあたまに乾物や鹽鱈をたべる位のも

のですね」

「和服は皆もつて居ませう」

「え、一枚位はありませう、どこ行きもそれですね。ごらん下さい私などもこれぎりです、この浴衣が學校行きにも東京行きにも着らるゝのですからね。お察し下さい」として着て居た浴衣の袖を引つ張つた。

こゝでも亦文相の被服に關する訓令の事を思ひ出した。二重生活も一重生活もあつたものではない。着のみ着のまゝとは是の事である。

「失禮ですが、君は何か待遇に就いて不平がありますか」

「さう」先生大に頭を傾けてる。

「君たちよりもつと貧乏してる人もあるでせう」

「あります。〇〇君などは、もう郡視學の候補者ですが、先日私がお尋ねした時など粟ばかりの御飯をたべて居ました」

粟と云ふのは九州の一部にしか見られないもの。麥よりもずっと安い穀物である。東京あたりで餅にするのとは大に違ふ。

「なる程、教員外にもつと貧乏してゐるものはありませんか」

「私共の町あたりでは全くありますまい。まア私共が最下層の生活をしてるものです。」

「へえ、君たちが！」これには私も全く驚いてしまつた。

「どんな日稼人でも一日に二圓位にはなりますからね。尋常科出た許りの子守婦でも月給八九圓で、それに賄付きですから、女學校出て教員などして十二三

圓の女教員よりいくら好いかも知れません」

「一帯教員はどんな事をかねて話して居ますか」

「月給の話でもちきりです」

「どんな事を考へて居るでせう」

「何ぞ好い口はないかなあ、位のものでせう」

「君は一生教員しますか」

「仕方がありませんから………然し滿洲あたりにも行つて見たいと思ひます。好い口をお知りじやありませんか」

「知らん事もないが」

「ほんとにありますか、ねえ」此の先生大に乗り出して來たが、私は滿洲必ず

しも好いものではないと云つて押し止めたが、さて後になつて考ふると、好い事をしたか、つまらん事であつたかすつかり分らなかつた。此の對話は實に眞面目な年若い田舎教師となしたるものであるから全く事實。些かのそのまゝである虚飾のない所である。文相敢ての一讀を希ふ次第である。

あ る 夜

其の夜は雨ふりであつた。

安川先生は今日の研究授業に若い訓導連から、しこたま油を絞られたがそれが悔しいなど、は夢にも思はれなかつた。

『何俺だつて若い時はやつたもんだ。彼奴等も今に見ろ、俺のやうになつて了ふ』

んだ』と高を括つて居たが、N訓導の猛烈な追撃には流石に胸がとゞろいた。

『奥様の内職のお手傳ひばかりしないで少しは新刊書でもお讀みになつてはどうです』とあの高慢ちきな口ぶりで、人もなげに云ひ離つた驕慢な態度には、幾年ぶりかて若い血潮が湧き返る思ひがした。

『何ッ』と云つては見たもの、其の聲は餘りに小さかつた。女教員等が笑ふすすすの聲に遮られてN訓導の耳にも、校長の耳にも留まらなかつた。その中に熱はさめた。安川先生は若いN訓導の方をむいて、てれ隠しにへ、えと笑つた。

今日に限つて又誰も彼も批評をする。生意氣にも准教員まで先生を馬鹿にしたやうな批評をする。批評の数が多いのは何でもないが、さて歸りがおそくなるのが氣が氣でない。家もちのS女教員も同じ思ひだと見えて幾度か時計を出してな

がめて居た。

日がくれて、薄ら寒い初冬の空からは、泣き出す様な雨がしとくと降り出した。若い人々は皆とんで歸つたが、折あしく安川先生は今日、補習夜學の當番であつた。小使が炊いて呉れた外米の御飯に一尾の鹽鰯、先生は舌鼓を鳴らして晩飯を認めた。それから引續いて三時間の勤務、元より力を入るゝてなく、魂を込むるでもなく、只機械のやうに本をよんできかせるだけの仕事ではあるが、晝間からの緊張にともすれば、こくりと頭が下つて補習の生徒に笑はるゝのであつた。

家路についたのはもう十時を少しすぎた頃。今夜は何れ位仕事をしてるだらうかと。先づ氣にかゝるのは細君の内職の仕上高であつた。とある路次を左に折れ

ると、そこには一軒のあばらやがあつた。内からは淡い豆ランプの光が洩れて來てる。戸口のあたりにおかみらしい一人の女と娘であらう十二三の女の子とが、人まら顔に木戸の方を眺めて居た。そこに空車を引ばつて、そぼふる雨にぬれたまゝ、駈けて來た男があつた。聲をきいて内からは老人迄も下りて來た。

『降り出して困つたらうなあ』

『じく〜になつたなあ』

『はよう、あたりなはり』家人はよつてたかつて、その男をいたはるのであつた。そして男もいそ〜と絆纏をぬいで居た。

『あゝ何と云ふ美しい圖だらう』

安川先生は暫く其の光景に見とれて居たが、ふと思ひ返して自分の家へと急が

れた。

『只今』

障子をあけて中にはいられたが誰一人かけつけて来るものもない。

五燭の電燈の下では細君が眠たさうな眼をして、がら／＼、がら／＼と麻絲つなぎの小車を廻してゐる。一寸眼を上げて先生の方を見やつたが、別段會釋をするでもなく又眼を車の方にそらした。

『今日はいくらつないだかい』先生の言葉はやさしかつた。

『今頃まで何して居なさるの？』

『今日はお前、夜學の當番だよ』

『夕飯もたべずに？』

『あゝ、批評會があつたもんだから』

『ふん』細君は又がら／＼と車を廻し初めた。

安川先生は黙つて押入れから夜具を出されるのであつた。

南瓜の安賣

授業を終へて職員室に歸ると、掲示板に慙うかいてある。

『南瓜少々拂下げ候——園藝係』

常任當直のF君が汗を拭き／＼やつて来て戸の處から此掲示を見つめて居た。

『南瓜か。や、行こ行こ、君早く行かんとなくなるぞ』とすぐに實習場の方へ駆けて行く。私も後からついて行つてみる。

「ね、O君僕には大きい奴を五つ呉れ」

「僕は一人だから、さうは入らんが三つ程」

「何、君の三つは少し多い。S君に一つ譲れ」

「先生、先生、O先生」後の方からK女先生が聲をからして呼ぶ。

「ハイ〜」返辭だけはするが、O君中々忙しい、二十人許の職員が一時につめかけて、そこらにころがした大小二三十個の南瓜を、抱へてみたり、叩いてみたりしてゐる。

「君はこれか。慾ばるな。五つ？」

「家族が多いからね」

「三貫六百目」

「よし、〜」

「これは甘いよ。尻が大きいからな」

「尻の大きいのか甘いかい」

「うん。なるべく大きいのをより給へ」

後れ走せに音楽のI君がかけつけて来る。重さうに兩手に一つづつ提げて行くT君をふり返つて。

「まだ、あるかね、あるか？」

「早く行かんとないよ」

「實習場の一隅はまさに公設市場の觀を呈して居る。高師訓導と南瓜、私は苦笑を禁じ得なかつたが。心の底には一つの淋しい思が湧いた。」

貧しきものは貧しきなり

キリストと云ふ聖人の申すには

『貧しき者は 幸なり、その心富めばなり。』

と、その心持はキリストになつて初めて味はるゝ。私がどれ程貧しくても幸と思ふ事は滅多にない。心の富を感じうる程の人であつたならばどうの昔に教員の足を洗つて居るかも知れない。

喰ふものさへ碌に喰へない人は、考ふる事さへ大儀である。考ふる爲に神経をどれ程消耗するか、その費消を補ふ可き何物もないのに矢張り考へてはエネルギーを費消して居る人は、とどのつまり神経ばかりになつてのだけ死するより外はな

い。貧乏者は矢張り貧乏者である。物質に乏しい教員は精神にも乏しい。彼等は何程の精神生活をなしつゝあるかと云ふに、

『どうすれば月給が上るか』この一語でつきる。若い働き盛りの者の頭でさへ徹頭徹尾月給で一杯になつて居る。彼等の精神生活と云つたならば先づ月給向上策位のものにすぎない。『何ぞ好い口はないかなあ』うか／＼した心で自分の仕事に従事して居る。本を読むも講習を受くるも悉く月給を上げて貰ふため、教授も訓練も視學によく見て貰ふため。よく見て貰つて月給を上げて貰ふためにすぎない。嘗て某郡で増俸を全々停年順にし拔擢と云ふ事を絶対にせぬ事にした。若い教員等は之を『右へ準へ』と稱した。『どうせ右へ準ふんだもの勉強してもしなくつ

ても同じ事さ』と云つて全郡墮氣満々。些かの生氣もなくなつて了つた事があ
 る。この一事よく教員の精神生活の貧弱を物語る。
 彼等の住む教員國には殆んど思索と云ふものがない。淋しい國である。たまに
 讀書する人はあつても考ふる人はない。考へて我物にする、我物を産む、我を作
 る、我を活かす人が極めて乏しい。殊に人生を考へ、藝術を思ふの士は乏しい。
 私は長い間その國の淋しさに泣いた。此の淋しさ貧しさは矢張り物の貧しさよ
 り來るものである。貧乏が原因であらねばならぬ。彼等は喰ふ事を考ふる外に何
 物を考ふるの餘地すらないのである。
 恚うした教員が人の子に與ふる影響はどんなものだらうか。子をもつ親の一考
 を要する問題であると思ふ。

貧しきものは其の心卑し

武士は喰はねど高楊枝、よい言葉である。楊枝は使へども體操の授業が出来ぬ
 では仕方がない。まさか缺勤して二疊じきに端座して居たところで教育は出来ぬ。
 食ふだけは食はして、やるだけはやらせなくちや。昔は腹が減つてもひもじう
 ない人があつた。教員の中にも可なりそんな人が多かつた。眼がしら／＼する様
 に凹み入つて、足がひよろつく様になつても矢張り我慢してゐた。人々が溢る、
 財貨をつかみどりする様を指をくはへたま、眺めてゐた。懐からは手が飛び出
 しさうなのをじつと怵らへて。『苟も教育者だ。人間ではないぞよ』と云つた顔
 して、棚から牡丹餅の落ちて來るのをまつて居た。けれども牡丹餅は依然として

落ちて来ない、多くの人々は皆何物かにありついた。もう吾々にも何かありさうなもの、只管下さるものをまつて居た。その心の淋しさよ。これが渴しても盗泉の水を飲まざる。古の武士と同じ心から起つたものなら嬉しいが、心のさもしさを押し隠さんとする囚はれた考から来るのだから仕末が悪い。

『おかあちやん。又来たよ』

子供がばた／＼と勇んで知らせに来る。鼻緒くけに餘念もなかつた細君『さう？』と許りこれも大にこく。

『おや、いらつしやい。何年生ですか。お、三年生。おあついね。よく来ました。』早く其の風呂敷包をお出しとは流石に云はない。あつちやんが、何時ぞや遊びに行つた時には怖い奥様と思つたが、今日は又何と云ふ優しいお

方だらうと、児童は怪しみ乍らも、喜び勇んで風呂敷をとく。

『先生にあげて下さい』

『おかあちやん、又お砂糖？ おや今度はお菓子』子供が大よろこびではねまはる。

『これ、あつちに行つていらつしやいと叱つておき乍ら。』

『まあ、結構なもの、先生は今お留守ですから、お歸りになつたら屹度さう云ひますよ。山川さんでしたねえ、又いらつしやいよ。此度はゆつくりとね』細君は品物を受取るともう撃退策にかゝる。

『おかあちやん、早く見せて。坊やにもお菓子一つ』

児童が歸るより早い。細君は菓子折の蓋をあける。隠れて居た主人の先生も出

て来る。子供が覗く。

「いひ、立派な菓子だね、これ一つ五錢だよ」

「あれの内は金持だから此れ位しても好いよ」

「一つ二つ三つ四つ」細君はもう數をよんでる。

「いくつ？」主人も子供も一つつまんだまゝみてゐる。

「五十、二圓がたあるわ」

「うん、をいしい事だね」

「商品券でも持つてくれば好いにね」

「ごめん下さい」

「おや又来たぞ。景氣が好いなあ」

いそ〜と細君は玄關に出る。子供も後からかけて行く。

後髪引かる、思をして

田舎教員は生半可な勉強などした爲に田舎に居たまらなくなつた。光にあこがれて都へ〜と上つて来た。だが然し、生活の向上、自我の充實に寸刻も安んずる障なく焦燥した彼は、更に教員生活そのものが不満になつてきた。それには様様な理由がなくてはならぬ。

酬ひられぬ努力、虐げられた職業、恚うした感じも元よりすべての教員者流の頭に充滿して居た。然し彼を動かしたものはそればかりではなかつた。人間の物慾には際限がない。上を見れば幾らも幾らも上がある。然し下にも下がある。彼

自身の生活そのものは決して左程貧しいものではなかつた。教員だつて食つて行けぬ事はない。況や初等教育界の奥の院として多少の誇りを有する高師訓導の位置と、十年の教員生活によつて建設し得た或物とは、さう容易にふりすてらるゝものではなかつた。

然し彼は遂に満足しきれなくなつた。

飽く事を知らぬ彼の知識慾と、寸刻も弛緩し得ない彼の奮闘心とが、雅な古き都に愛憎をつかして了つた。ともすれば隋氣に満たされやうとする環境の内に在りて、彼れ一人が燃え立つ向上の焰を更にあふり立つる事はどつしても出来なかつた。淺弱な研究に、烏なき里の蝙蝠然たる生活振に、満足するには餘りに若い身であつた。

然も彼には尙一つの理由があつた。

脊負はれぬ迄に負はされた彼の責任。年若い身であり乍ら一興と弟妹、老母への孝養と養育とは、彼をして多年其の燃ゆるが如き或物を抑止せしめて居たが、今や漸く事の一步を遂げた。

『これからがほんとうの俺の生活だ。これからがほんとうの俺だ』

彼には慙うした感が犇々と迫つて來た。

好きて師範學校には入り、好きて教員になつた彼にとつて、今更教員生活が嫌になつた。と云ふ譯ではなかつた。同じ教員するにしろと彼の心は叫びた。

刺戟！刺戟！刺戟なくして吾々は生きて行けない。激刺たる生活の一要素として如何してもそこに刺戟を求めねばならぬ。眠れる如き古き都、儉安の夢に落ち

なんとする教員生活、精神生活に乏しき世界、藝術の露ひなき世界そこに灰色なせる幾年月を過すべく彼は到底堪へ得られなくなつて來た。

「よし行かう」

恚う決心した時彼の心は躍り立つた。

「今から尙五年間、學生々活をしてみたい。どうだお前の決心は」

彼が妻の同意を促した時、流石に彼女の面には不安の色が漂ふた。

さなきだに物價の狂騰に心を惱ましつゝ、主婦として、聞くだに恐ろしい東京の生活難、どうして生きて行かれよう！

「だつて今やらぬとやる時はない。もう妹も弟も夫々に片づいたし、子供が生立つ迄茲數年間が俺の修養時じやないか」

彼が生活の主義、彼が人生に對する見解に對して相當の理解ある彼女として、より以上逆らふ事は出来なかつた。妹や弟や總ては之から彼を援助しなくてはならぬ事になつた。

彼の心は決した。更に都へ、光の巷へ！

夜は更ける、妻戀ふ鹿の聲が春日野の奥より、物哀れげに暗を破つて來る。窓を押せば初秋の月が高く冴えてる。懐しい三笠の山も春日の森も、今は早や思ひ出のたねとならうとしてゐる。

かの教室から眺めた御笠山の紅葉の錦。そぼふる雨に打ち煙つた五重の塔、あれあはれ、思ひ出は多い。自然は懐しい。然し私を鞭つものはさうした美しい自然の力ではない。(完)

大正八年初秋

教員物語終

春日野のほとりにて

天壘子

大正八年十月十日印刷
大正八年十月十三日發行

不許複製

發行所

東京市神田區北神保町
振替口座東京八一五

會社 弘道館

著者

志垣寬

發行者

東京市神田區北神保町十一
會社 弘道館代表者
辻本卯藏

印刷者

東京市芝區愛宕町三丁目二番地
中野鉄太郎

教員物語與付

正價金壹圓參拾錢

社會式株刷印洋東所刷印

264
32

終

